

33-553



33

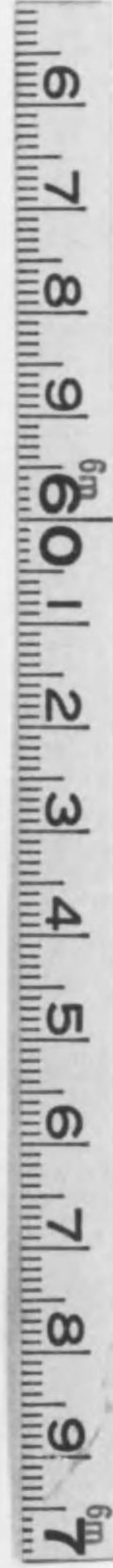
553

琉球の研究

下

加藤三吾

国立国会図書館



始



エト3Y-67

33-553

自序

琉球語は支那語の一派ならんと思ふは謬見なり、琉球の文化は明清文化の餘流ならんと思ふるは誣妄の甚しきものなり、抑も琉球の言語組織は日本古言と其系統を同ふせり、琉球文化の内容は明清の影響を受けたること寧ろ僅少にして、其實質は日本の感化を被むれること頗る多大なるものあり、試に琉球に於ける上古の神歌と中世の韻辭と現時の俗謠等とに就て仔細に玩味し來る時は何人も思半はに過くるものあらん、此篇小なりと雖も聊か琉球古今歌文の秀逸を網羅したるものなり、琉球の藝術を解せんと思ふ人は宜しく一讀すべし、庶幾くは琉

加藤三吾

其志



琉球思想界の傾向を窺ふに足らん乎

窓外に平戸海峡の潮聲を聴きて深更燈下

明治三十九年晩秋

卒土濱人

加藤三吾記す

琉球の研究 下卷

目次

第一章 沖繩の言語

第二章 神歌

一、をもら

○きこゑをふきみがをもら

二、をむい

○海神祭のをむい

三、をがんつゝ及をたかべ

○みをやだいのをがんつゝ

○麥初種下のをたかべ

四、くゝいに

○うりちんくゝいに

第三章 琉歌

- 一、短歌 四十三首
- 二、仲風 二首
- 三、長歌 二首
- 四、口説 三首

第四章 俗 謠

- 一、押太鼓ふし 二
- 二、國頭さばかり 一
- 三、子守歌 三
- 四、童謠 二
- 五、流行歌 二

○德利

○平良辻の茶賣

第五章 戯 曲

- 一、狂言

- 二、組踊
- 老若の縁組
- 手水の縁一名波平山

第六章 和文及和歌

- 一、苔の下
- 二、短歌 八首、長歌 一首

第七章 碑文、候文及漢詩

- 一、ようどれのひのもん
- 二、琉球國新建至聖廟記
- 三、獨物語 二ヶ條
- 四、御教條 五ヶ條
- 五、漢詩 八首

# 琉球の研究

下卷

加藤三吾著

## 第一章 沖繩の言語

昔から沖繩には文字なく、神歌や物語などは凡て口つから唱へ傳へたものである。(カタカチ)と呼ぶ符號あるけれども、これはむかし(ユタ)といふ巫懸が用ゐたに過ぎないもので(カンナズミ)と呼ぶ一種の數字と(ヤーナ)と呼ぶ紋様の家號とは、今も尙ほ國頭地方農夫の間に行はれてをり、島民の一部は現に繩を結んで大小の數を計算し、與那國島に一種の象形字あつて市場に使用されてをる、けれども之等は共に沖繩の文字と名つくべきほどの價値あるものでない、七百年前に舜天が自立した頃、いろは四十七文字始めて輸入し、五百年前に岡族三十六姓が久米村に移植せられた頃から漢字も流行するに至ったと思はれる、それから天文年間に(オモロ)雙紙が平假名で書かれてから、古來の神歌も口傳の韻語も記録として存することになり慶安三年に向象賢が中山世鑑を撰してから和文

体の歴史始めて成り、古老の口碑を書き集めた遺老傳も此時に編せられて、候文体の仕置書も出つるやうになつた、

予は茲に最も古い神歌から順次に下つて現時の歌謠雅文等を列擧し、一は以て沖繩に於ける言語風俗の變遷を考ふべき資料に供し、一は以て琉球に於ける文藝發達の一斑を窺ふべき案にしようと思ふ、しかし先づ順序として沖繩の言語に就て少しく述べねばならぬ、始て沖繩に渡りて其方言を聞けば、何人も容易に解し難いからして、或は南蠻娘舌と嘲けり或は支那語の一派ならんなど、速断するともないに限らぬ、勿論琉球久しく支那と交通した結果として、名詞の幾分に支那語を認めることあるけれども、動詞や形容詞などは全く本邦語の轉訛したもので、其語法に於ても動詞は常に目的たる名詞の下に來ることは本邦語と異なることなく、却て本邦古語を其儘に存することが多いのである、又其言語の性質を檢しても、支那語の如く一音一語をなす所の單綴音語でなく、實に本邦語の如く數音組合つて一語をなす所の複綴音語であることが知られて、所謂(ウラルアルタイ)語系に屬すべきものである

こは疑ふべきでない、

抑も、時代移るに従て言語變し地方異なるに従て方言同しからの免れ難いこと、本邦西南隅なる薩州又は沖繩の方言と東北隅なる奥州又は蝦夷の土語とは著しい差異あるけれども、或點に於ては却て一致するものがある、思ふにこれは往昔一般に行はれた言語が、中央地方に於ては既に幾回の變遷を経て全く其跡を絶ちたるに拘はらず、僻遠の地方に於ては尙ほ昔時の古語を其ま、保存することがあるからであらう、

試に、(ハ)行音に就て考へて見ても、古音の(バビブベボ)が一轉して(フフイフフエフオ)となり、再轉して(ハヒフヘホ)となつたことを事實とすれば、本邦の東北隅と西南隅とに其古音の痕跡を存してをるやうである、即ち奥州で、日と火とを(フイ)といふと同しく沖繩人も(フイ)と發音する、(アイヌ)語で、(ピラ)又は(フィラ)が絶壁を意味すると同しく、琉球語で、阪路を(ピラ)又は(フィラ)と呼ぶ、其他に國頭地方で、舟を(ブニ)、鳩を(ボト)、畑を(バタキ)といひ、八重山嶋では、母を(アッパ)、人を(ブト)といふなども注意すべきものであるまいか、それから又、九州は一般に

(ラリルレロ)を(ダヂツデド)に轉するが、沖繩にも此訛音がある、特に琉球語には約音と拗音とが頗る多く、例へば神名の(キコエオフギミ)を(チフィチン)と發音し、村名の(ホモエイ)を(ビン)となし、何々ニテアリハベル)といふべきを(何々デエビル)となすやうなことが多々あつて、(カキクケコ)若くは(タチツテト)を(チャチチチュエチヨ)に變化する場合頗る少なからぬことも、沖繩の言語が缺舌のやうに聞ゆる原因である、

第二章 神歌

神歌は沖繩上古の韻辭で、其用語は一般に(カミンチュクタバ)即ち神職語と呼ばれ、今日では既に死語に屬してをるものである、就中、(オモロ)は最古のもので、(オムイ)之に次ぎ、(オガンツ)、(オタカベ)又之に次ぎ、(クウイニヤ)に至つては割合に新しい語であるから、多少は現今の俗語をも交へてをる、けれども尙ほ(カミンチュクタバ)に屬すべきものである

(一) をもろ

(オモロ)は古來沖繩に傳はる神歌で、祭の時に神を崇

へる歌や祝の時に唱ふる詞なども含み、神歌中の最も古く最も神聖なものである、(オモロ)雙紙と呼ぶ冊子には、總數一千五百餘首の(オモロ)を記してをるが、之は古から(ノロクムイ)等の口傳に因て沖繩各村に散在してをつた不文の(オモロ)を三百七十餘年前に始めて本邦平假名で書き集めたもので、寶永七年に書き改めたのが今も尙ほ保存されてをる、冊數は二十二冊で、第一冊は享祿四年、第二冊は慶長十八年、他は元和九年に出來たものである、

宜野灣間切大山村安仁屋氏は、代々(オモロヌシトリ)といふ役で、(オモロ)雙紙を保管し(オモロ)の謠方を傳へ(オモロ)に關する儀式を掌り來たのである、(オモロ)の詞は甚だ古雅で今の沖繩學者も容易に其意味を詳にすることができない、(オモロ)主取は之を諳ひ得るけれども之を解することができない、茲に擧ぐる一例は凡て古い雅言を以て綴られ凡て對句の調を存して凡て韻をふんで凡て口唱に都合よいやうに作られてある、

○きこゑをふきみがをもろ

を もろ

○かくらごよてがふし

- 一、きこゑをふきみ(神名)が、ごよむせたかこ(神名)が、みしまいのられ(國土ヲ祈ラレ)、
- 又、しよりもり(首里森)ちよわる(御座ス)、またまもり(眞玉森)ちよわる(御座ス)
- 又、なさいきよもいあんしをそい(親父ノ如キ按司サマ)、あがかいなであんしをそい(我が親愛ナル按司サマ)、
- 又、をふきみよ、いきよて(行會テ)、せたかこよ、よてつて(寄合テ)、
- 又、あそこ(舟)なよ(繩)、こよわちへ(整ヘテ)、みをふね(舟)なよ(繩)、こよわちへ(整ヘテ)、
- 又、あまのはこらしや(日出度サヤ)あまのまうれしや(喜ハシサヤ)、
- 又、よひきとみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、せちあらとみ(舟)くりうけて(浮ベテ)
- 又、せつきとみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、くもごこみ(舟)くりうけて(浮ベテ)
- 又、まやいとみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、をじあけとみ(舟)くりうけて(浮ベテ)

又、たけく(岳々)よ、いので(祈テ)、もりく(森々)よ、いので(祈テ)

又、あをりや、とりよわれて、をりや、とりよわる、

又、あそこかす、つけわちへ、みをうねかす、つけわちへ、

又、そさん(波)なごやけて(和ギテ)、あをなみよ(大波ヲ)ごやちへ(止メテ)、

又、をうけかす、みまぶら、くりうけかす、みまぶら、

又、きみくしよ、ゆしらめ、ぬしくしよ、よしらめ、

(二) をむい

(オムイ)といふのは、(ノロクムイ)などの神職が其奉仕する(オタケ)や(オガンノモリ)の神に對して、祈願又は報謝の意を述るもので、一種の祝詞である、其語は(オモロ)に比較しては時代稍や新らしく、今の人も多少は之を解することができ、けれども尙雅言や死語

などを混してをるために、所謂(カミンチュクトバ)として普通には解し難いもの、類である、思ふに最も古い(オモロ)の語を(ノロクムイ)等が口から口に傳誦する間に、次第に轉訛して多少の俗語を交ふるに至つたのであらう、其一例、

○海神祭のをむい

もごむかしあたること、あまみよにひちることい、(古キ昔ノ世ニアリシ事ヨ)

なごもりのをふかみ、よやげもりのみよつぎ、すがまもりのすじく、(ナゴ森、ヨヤゲ森、スガマ森ナドノ神達)

なごもりにかみよやいみしうち、すじよやいみしうち、(ナゴ森ニ神寄合ナサレテ)

やまごかみがしま、よろんうきしま、あらぶはあしま、いへやちいしま、(大和ヤ輿論ヤ永良部ヤ伊平屋ナドヲ語ル意)

いそうけがいでたちこと、こがねじくわちる、たまうけがいでたちこと、なんぢやくわちる、(磯殿王殿ノ出立デアルカラ金銀ノ盃ヲ酒宴スル)よみのまにによりいで、なんかはまにしちりい

でて、(弓ノ濱、七日濱ニ集リ出テ)

あけしけしあけし、ぶんのねのあけし、あけしけしあけし、たけがねのあけし、(彼處此所ノ蜻蛉ヲ呼ブ意)、

うらめぐりめぐて、じゃんのくつふむく、(鰐魚ニ乗テ浦廻スル意)

をしかせにふかささん、てるてだにてらさん、(順風ニ吹カレ和日ニ照サレ)

うさなごりみしうち、ざりごいみしうち、(魚介ヲ漁リナサレテ)

どぐちをふいさあんど、みなごをふいさあんど、(渡口水門ノ寒キヲ告グル意)

なまやうしほみちうみ、なまやうしほみちうみ、(今ハ潮ガ満テ居マスカ、干テ居マスカ)

たれちしびぬらさんごう、たれはかまぬらさんごう、(垂紐ヤ垂袴ノ水ニ浸ルヲ戒ムル意)

なつたうみわたりたぼれ、(海上安全ヲ祈ル意)

あがりごしま、あがりやしま、(東方ノ島々ヲ數フル意)、

をんこいく、(御見送り)

(三) をがんつゝ及をたかべ

(オガンツ)は、城中で祝の儀式に、神職が神に謝する詞で、(オタカベ)は、(ノロ)等が神に告げ又は願ふ時に唱ふる詞である、其語は共に(オモロ)よりも(オムイ)よりも更に通俗であるが、多少の古言を交へてをるので、尙ほ(カミンチュクトバ)と稱すべきものである、其例、

○みをやだいのをがんつゝ

みをうみのけやべら、をがんにんすのど、みをうみのけらしむしいべる、(御願ノ者共申上仕マサル)

けふのよかるみひよいに、みをやだいのをがんをがみやべすに、(今日ノ吉日ニ宮仕御願仕リマサルニ)

をふこをりのをざしきをがまれみしうち、をのうへにみをしやくをたばいみしうわち、もすですですらしみしうち、(大庫裡ノ御坐敷拜見イタサレマシテ)

、其上ニ御酒ヲ下サレマシテ、千万辱ケナク)

つぎくのものまでみきをたばいみしうわち、もすですですらしみしうち、このごをんごうとさや、

(次々ノ者マデ御酒ヲ賜ハラレテ、此御恩貴トサヤ) きこゑをふきみみをめへかなし、ごもごもささがまれみしうるをかほう、をみくつをすてももの、ごもすへのをかほう、(王母様御子様方ノ幾久シク涉ラセラル、御果報)

よるむひるむ、かめねかいしちて、みややたいりやきもすいたいすい、がらめきみやすらんたいてご、(晝夜ヲ兼ネテ仕官ハ肝ニ銘シテ奉公仕ラントテ) し、かいのをがん、みをうみのけらしむしいる、(皆々祈リ申上奉リマスル)

○ 麥初種下のをたかべ

しりてんじなしから、よかるひより、まさるひより、いらいいたち、そりいたち、みをこごをたべみしうちごご、(首里王様カラ吉日ヲトシテ仰セ下サリマシタノデ)

のちかねしうかねや、みちびからよかびから、みかきいで、そりいいて、(下々ノ者ハ三日モ潔齋シテ)、をかまがなしをめへ、をかみのをめへ、をそばよてをどりつぎ、せんかみはい、まんかみはい、をがみやべん、(火神サマ御神サマニ頼リマシテ千拜万拜

ので、最も通俗なのは、

いめちかわさごりめ、ごじもたちたーばれ、ごりやーすーご、をーまちさーべーら

(彼方ニ参ラレタナラ郎君ヨ、御手紙ヨコシテ下サレ、安心シテ御待申シマシヨウ)

といふのであるが、古來傳はる(クワイニヤ)に至ては、普通の婦女に記憶するものなく、唯た(チードイ)と呼はる、女は能く之を請してをるので、依頼に應じて音頭を取り他の婦女は之に和することになつてをる、即ち老幼の婦女共が團欒して一場に集まり、手拍子を合せて謠ひ、足拍子を取て踊りながら丸く回るを例としてをる、

古い(クワイニヤ)の中で、(アガリユウ)は知念玉城森々岳々の威霊をた、へたもの、(オフグシク)は柑橘の美果を賞揚したもの、(ウリジン)は布織の事を謠つたもの、(ヤラシイ)は靈鳥を捕へたよしを述べたもの、(カチグシク)は家造の祝を表したものであるが、何れも吉事や雅言を撰んで歌にしたもので、概して對句より成り、現今の俗語と多少異なる所あるけれども、よほ近代の言語である、茲に其一を擧ぐ、

仕リマス)

あらむきや、はつむきや、のはるのみにいたち、まきちらさや、(新麥を野原ニ撒キマスカラハ) むしけがらは、あかやがしちやにをしくみて、をたびみしうわれ、(毛虫ハ赤茅ノ下ニ押込テ給ハレ) あをもとにむいたて、あかもとにむいたて、ほうみしうみ、ごりまさいありまさい、をたほいみしうわれ、(青莖カラ赤莖ニ育テ上ダテ、見事ナ麥穗ガ澤山探レマスルヤウニシテ下サレ) しちてるまされば、ちもぶくいあたりて、もごしきやて、せんとしきやて、せんがみはいまんがみはい、をがみやべら、(天ガ下ハ何處モ仕合好キヤウニ百千歳カケテ千拜万拜仕リマシヨウ)

(四) くいに

(クワイニヤ)といつて、家族中に旅立する者あつた時、道中の安全を願はんためご、留守せる家人の憂情を慰むるために、出立後三日間は親族知人集まり來て歌ひ合ふ詞がある、現に首里那覇の婦女間に行はる、も

○ うりぢんくいに

うりぢんがはつがをう、わかなつがまはだをう、(二三月ノ初芋、初夏ノ眞芋)、またけくうだつて、またけいやびつて、(眞竹ノ管、眞竹ノ矢ヲ、作ツテ)、をはながたひきぢちち、ばらんがたぬきぢちち、(花形葎形ヲ抜キ出シ)、やまごからくだゆる、かねのわのみをうぐち、(大和カラ下ツタ金環ニ通シテ)、をそばひきよせて、をめるにひきよせて、(御側ニ御前ニ引寄セテ)、はたいんをやんみんち、んむんをやんみんち、(機糸、組糸ニ編ミテ)、つみなかへつんち、わくなかへくゆけて、(種ニ紡ギ框ニ纏テ)、よかるひゆいらで、まさるひぬきぢちち、(吉日ヲ撰ミテ)、ごひるかすかけて、やひるかすかけて、(十尋八尋ノ經カケテ)

はていんふごちのちゅけて、んすんふごちのちゅ



けて、(機ノ梭ニ上セテ)  
 まちちなかへまちけて、の、ばたにをちけて、  
 (巻本ニ卷キ機具ニカケテ)  
 しらちびやかかけて、あかちびやかかけて、(白糸赤糸ノ梭カケテ)  
 なやうかしちうちさ、しちいしちいうやがて、  
 (今ハ早ヤ次第ニ織出シテ)  
 みちのひにぬのなが、よかのひにをりんち、(三日ニハ中程、四日ニハ織了テ)  
 すむかわにすまち、あさかわによすち、(清キ泉ニ洗ヒ濯キテ)、  
 とひるさをにさげて、やひるさをにさげて、(十尋八尋ノ等ニ下ゲテ)  
 なやうしみしなゆさ、いちたくびたくで、(最早ヤ手繰リ疊ミテ)、  
 なかまきにからまき、いちぶなかへをちけて、(巻キ卷キ敷布板ニ乗セテ)、  
 ざらいさらいにやがて、しちいしちいんやがて、  
 (次第ノニ仕上リテ)  
 よかるひやいらで、まさるひゆぬきちち、(吉日ヲ

撰ミ定メテ)  
 をみないたそるて、をやがなしをそばをて、(姉妹共ガ母親ノ前ニ揃テ)、  
 かしうちからみなげとて、まなかやみそでとて、(織出カラ身丈ヲ取り、真中ハ袖ニ取り)、  
 ちんみ、やみふすむ、んくんにがたたちちい、(織末カラ「オクミエリ」ヲ断チ出シ)、  
 『某』さこのしが、やまとむまうちめゑたいむしゆ、(某君ガ大和行ノ仕官服)  
 うりみし、うちさこのし、も、はたちをぐん、(ソレヲ着用サレタ郎君ハ、幾久シクモ)  
 あやざはねみるちでん、しるざはねみるまでん、  
 (綾羽、白羽、見ユルマデモ)  
 をぐんし、らばあんちあるうごう、ねがてをらばだんちあるうごう、(祈念シテ居ルカラ息災安全デアルヨ)



### 第三章 琉歌

琉歌は和歌に對してつけた名で、普通に八八八六の四句三十音で綴られてあるが、詞も調も想も趣も自ら獨特の体を存してをる、而も今の和歌の如く徒に字韻に束縛せられて不自然に陥るやうな嫌なく、敢て題を設けて作るこいふこともなく、日に一丁字なき田舎人も興至り情動けは發して歌をなし得るのであるから、琉歌は寧ろ歌なるもの、本性に適してをるこいふべきである。

すべて琉歌は蛇皮線に和して謠ふもので、其曲節の数は二百五六十種に上つてをるが、就中、(カヂヤテ)、(オンナ)、(ハンタマ)、(コテイ)、(ジャシキ)、(ハヤチクタン)、の數曲は(ゴゼンフウ)と稱して最も普通なもので、特にカヂヤテ節ノ(ケウノフクラシヤ)といふ歌は、各種の歌を謠ふへき最初に必らず謠ふことになつてをる、思ふに琉球美の粹は琉歌に因て濃艶の色を呈し、琉歌は蛇皮線の糸に觸れて微妙の聲を放つといふも過言であるまい、  
 便宜上茲に琉歌を分つて四種となす、短歌は所謂純

粹の琉歌で、長歌及仲風は共に琉歌の變體と見るべく、口説に至つては琉歌といわんよりも寧ろ琉球人に因て摸倣された本土歌と稱すべきものである、

#### (一) 短歌

短歌は普通の琉歌で、八八八六の四句三十音より成り、上句十六下句十四となすものである、此体は六百年前の英祖時代から始まるに稱してをるが、慶長役後に薩州との交通頻繁になるにつれて、著しく和歌の影響を蒙つたことは事實である、それで『讀人不知』として古から傳はる古歌中には、想も高く調も雅で如何にも琉歌の特色を發揮してをるもの甚だ多いやうであるが、時代下るに従つて次第に和歌に摸擬せんとする傾向あつて、現今の琉歌に至つては殆んど和歌化したらんとしてをる、

○かちやてふう 讀人しらす  
 けふぬふくらしや、なをにちやなたてる、ちぼてる  
 るはなぬ、ちゆちやたぐと

(今日ノ日出度サハ何ニカナ譬ヘン、苔ミ居ル花ノ露ニ出會タ如シ)

同

だんぢ<sup>〇</sup>かれよしや、いらでさしみせる、みなぬつな  
これは、かじやまごむ

(目出度キ吉日ヲ撰ミナサレタ、御船ノ鑑解ケ  
ハ風ハ眞トモ)

〇同

久米具志川王子朝盈

いさなぐぬいしぬ、うふしなるまでん、うかけふせ  
みし<sup>〇</sup>うれ、わうし<sup>〇</sup>ぢやなし

(「女兒ノ弄<sup>〇</sup>小石」ノ大瀬トナルマデモ、御代  
シロシメセ我ガ御主様)

〇同

北谷王子朝騎

ごちわなるまつぬ、かわるくごねさめ、いつもはる  
くれば、いろごまさる

(常盤ナル松ハ變ルコトナカラシ、何時モ春來  
レハ色ゾ増サル)

〇同

天久親雲上

すゆいてんぢやなし、もごわれち<sup>〇</sup>うわれ、うまん  
ち<sup>〇</sup>ぬまざりをがてすてら

(首里王様千代万代カケテ御座セ、万民悉ク仰  
キタテマツリマス)

〇をんなふし 讀人しらす

をんなだけぬぶて、うしくだいなれば、をんなまち  
がにが、てぶいぢ<sup>〇</sup>らさ

(恩納岳ニ登テ眺メ見下セハ、恩納松金(人名)  
ノ踊ノ手振ウツクシ)

〇同

同

ごしやなぐからご、よんてやち<sup>〇</sup>る、すいとな  
ぐさけに、あさかう<sup>〇</sup>らな

(歳月ハ名護カラ寄セ來ルト聞ク、名護ト首里  
トノ境ニあさか(木名)ヲ植エヤウカ)

〇同

恩納なべ女

をんなだけあがた、さごがうまれしま、むいむごい  
ぬきて、こがたな<sup>〇</sup>さな

(恩納岳ノ彼方ハ郎君ノ生地、山モ取除キテ此  
方ニナソウカ)

〇同

與那原親方良矩

うまよひちかゑせ、しばしむちみふし<sup>〇</sup>、をごにちく  
なぐぬ、ち<sup>〇</sup>だぬてみじ

(馬ヲ引返セヨ暫シ眺メタシ、音ニ聞ク名護許  
田ノ手水)

〇はんたまふし 讀人しらす

でかようしちりて、ながみやいあしは、けふやなに  
たち<sup>〇</sup>る、じ<sup>〇</sup>ぐやでむぬ

(イデヤ連レ立チテ詠メ遊バン、今日ハ名高キ  
十五夜ナレバ)

〇同

神村親雲上

ふねにさほさして、つきにうたうたて、あすでうむ  
しるさ、なふ<sup>〇</sup>ぬみなご

(舟ニ掉サシテ月ニ歌ヲウタイテ、遊ブハ面白  
シ那覇ノ港)

〇同

護得久按司

ごびたち<sup>〇</sup>るはべる、まつよまてつれら、わんやは  
なぬむご、しらんあむぬ

(飛立ツ蝶々ヨ待テヨ一緒ニ行カン、我ハ花ノ  
アリカラヲ知ラヌカラ)

〇こていふし

尙瀬王

ごしやたちかへて、はつはるにむかて、みどりさし  
そへて、さかるうれし<sup>〇</sup>

(年ハ立還リテ初春ニ向ツテ、緑サシ添ヘテ榮  
ヘル嬉シサ)

〇はるにふかじや、すういてんぢやなし、なびくわ

かくさや、たみぬしがた

(春ニ吹ク風ヤ首里天子様、靡ク若草ヤ民ノ姿)

〇じ<sup>〇</sup>しちふし

讀人しらす

はるにうかきりて、はなぬむごしぬで、すぢに<sup>〇</sup>う  
うつち、むごるうれし<sup>〇</sup>

(春ニ浮カサレテ花ノ下ニ忍ンテ、袖ニ香ヲ移  
シテ戻ル情シサヤ)

〇はやちくたんふし

福地親方

ふいらまつぬかぢに、しぬぶあごかくち、あち<sup>〇</sup>れご  
むよすぬ、しゆらごめは

(平松ノ影ニ忍姿ヲカクシ、居レトモ他人ニ知  
ラレヤセヌカト思ヘバ)

〇んじ<sup>〇</sup>はやちくたんふし

讀人しらす

うふか<sup>〇</sup>んふ<sup>〇</sup>ざや、よいむごいむごい、わがよ、  
るとしも、あにしあらな

(婦女ノ大袴ノ「ひだ」ハ幾重ニモ疊ミ戻テ居ル、  
我ノ年波モ斯クアリタシ)

〇うふかにくふし

同

なぐぬうふがにく、うまはらちいしうしや、ふには  
らちいしうしや、わうらごま

(名護ノ大濱ニ馬乗スル面白サ、我が浦曲ニ舟  
遊スルモ亦面白シ)

○ ちんふし

同

わすたやんばるぬ、あだんふぬむしる、しかばゑら  
みしうれ、すいぬしぬめ、

(我等田舎ノ「あだに」葉ノ莖、敷キマスカラ御  
着座下サリマセ首里ノ旦那様)

○ いねまつんふし

同

くごしもつくいや、あんちうらさよかて、くらにつん  
あまち、まつんしやべら

(今年ノ耕作ハ何タル見事ナコトヨ、倉ニ積ミ  
餘リタレハ穂積ニセバヤ)

○ しっくいふし

同

くゝるあてからや、うみやまんすくむ、たつねらな  
をちゆめ、ありがゆくゑ

(心カケタ上ハ海山ノ底モ、尋子ズニ置カンヤ  
彼人ノ行方)

○ はなふうふし

同

てさじもちぎりば、よすぬみぬしぢしや、かしらご  
いなづき、てしやいまにげ、

(手巾ヲ打振レハ人目多シ、頭ヲ押ヘルニ托シ  
テ手ニテ招ゲ)

○

尙寧王母

てるてだにでんし、てらさごごしすが、よすしまぬ  
なれや、そゝにあゆら

(照ル日ニサへ當テヌヤウニシタガ、他郷ノコ  
トナレバ定メシ浮目ニ會ヒ居ラン)

○

尙寧王妃

にしかじぬまにし、ふちつみてうれば、あじすへめ  
てだぬ、みなどまぢる

(真北風ガ吹キツメテ居ルカラ、按司王殿ノ御  
船ヤ待チ焦カル、)

○

尙質王

ごふゐるやにうてん、やふゐるやにうてん、ちむごち  
むさらめ、あじむげすむ

(十尋屋、八尋屋ニ居レバトテ、心ト心トゾヤ  
按司モ下司モ)

○

尙敬王

わがみつてみちご、よすぬうやしゆる、むいするな  
うちよ、なさけばかい

(我身ヲ抓テゾ他人ヲモ知ラレル、無理スルナ  
浮世ハ愛ヲ第一トス)

○

尙泰侯

さかていくなかに、つしまなよめ、よかるほど  
いねや、あぶしまくら

(榮ヘ行ク中ニ慎マズバナルマイ、ミノリ善キ  
稻ホド畔ニ頭ヲ垂ル)

○

名護親方程順則

ほめられんすかん、そしられんすかん、うちよなだ  
やすく、わたりふしやぬ

(譽メラレルモ好マヌ毀ラレルモ好マス、浮世  
ヲ安々ト渡リタシ)

○

具志頭親方蔡温

ほまりそしられや、よぬなかなれい、さたんねん  
むのぬ、ぬやくたぢか

(譽ラレ毀ラレルハ世ノ常ナリ、何沙汰モナキ  
モノハ何役ニ立ツカ)

○

本部按司朝救

そらにふちすちる、かすでんしにはぬ、まつにをこ  
つれぬ、あるよやすが

(空ニ吹キスキル風デサへ庭ノ、松ニ音信ノア  
ル夜デアアルガ)

○

平敷屋朝敏

しかいなみたて、すゞりみつなちも、をもごごや  
あま、かきもたらぬ

(四海ニ波立テ、硯水ニナシテモ、思フ事數多  
クシテ書キ盡サレヌ)

○

仲島よしや女

たぬむよやふきて、うごつれむねらん、ふいぢい  
まぬふぬ、つちにんかて

(頼ム夜ヤ更ケテ音信モナシ、一人山ノ端ノ月  
ニ向ヒテ)

○

今歸仁朝敷

かじたぬでわたる、うちふにぬなれや、くゝるまほ  
ふいぢむ、じゆむならん

(風ヲ便リニ渡ル浮舟ノ習トテ、心ノ真帆引モ  
自由モナラヌ)

○

護得久朝置

むねうちぬたまぬ、ふいかいねんをちよめ、たごへよぬなかや、くらくなてん

(胸中ノ玉ノ光無シニオコウヤ、タトヘ世ノ中ハ暗クナルトモ)

又 吉全道

もぬよをみましよさ、ふゆのよぬそらぬ、つちになちわたる、はまぬちごい

(モノ思増スヤ冬ノ夜ノ空ノ、月ニ鳴キ渡ル濱ノ千鳥)

伊江朝常

をまんちぬまざり、くゝるうちひらけ、しゅりぢやなしをため、なゆらでむぬ

(萬民ノ凡テハ心ヲ打チ開ケヨ、首里王様ノ御爲ニナルデアラウカラ)

金武朝芳

まごるめばゆめぬ、よびうくちく、ふいごいぬぬいや、あかしぐれし

(マドロメバ夢ニ呼起サレクテ、一人寝ノ宵ハ明カシ苦シ)

山内盛熹

みよぬをふいかいに、みやますむふいごん、まみちふでんつる、くごぬしらし

(御代ノ御光ニ深山住ム人モ、眞道路デ出ルコトノシホラシヤ)

佐久本喜章

ゆめぬこぬせけに、ぬよでまたゆめぬ、んかしくごまでん、みしてくよか

(夢ノ此世ノ中ニ何トテ又夢ノ、昔事マデモ見セテ呉レルノカ)

伊保まうし女

んかしよしやたや、うまれたるしるし、はなぬあるかきり、さたよぬくて

(音よしや達ノ生レタシルシニ、花ノ有ルカギリ評判ノコル)

読人しらす

ちじぬなかんちに、うごしあなちくて、ごんぼするさごめ、うごちみぶし

(辻ノ中道ニ穿テ造テ、浮氣スル郎ヲ落シテ見タヤ)

同

あめのふらくや、てんもやうかわて、ごまいまそたちや、さなじぬがち

(雨ハ降ヲソウニ天模様ガ變ツテ、泊浦ノ鹽作ル人共ハ下帯ノ脱ゲルヲ知ラス)

同

うくちくゆちかふし、よすしらくちゆな、みるふいごやうんじ、ふいごいでむぬ

(見送シテ呉レテ難有シ他人ニ知ラセテ呉レルナヨ、見テ居ル人ハ「そなた」一人ダカラ)

(二) 仲風

(ナカフウ)は、普通の琉歌よりも句較や短かいけれども、情は却て長きを覺ゆる、これは琉歌から脱化した奇抜なものであるが、今はあまり行はれてをらぬ、例二

読人しらす

かたいたやく、つちぬやまぬふに、かゝるまでん

(悟リタヤ、月ノ山端ニ懸ルマデモ)

(三) 長歌

長歌は、普通の琉歌よりも句長く調も優で、節は緩なものもあり急なものもある、これも琉歌の變體と見るべきである、別に(ツラ子)と呼ぶ韻文もあるが茲に略す、長歌の例二

○ながきんふし

ゆうまぐりなりば、ちむんちむならん、

(夕暮ニナレバ心モ心ナラズ)

うむかじやいちぐ、わがすぢにすがて

(俤ハ何時マデモ我袖ニ殘テ)

あわりくらさらん、たいあしにまかち

(逆モ堪カテ唯ダ足ニ任セテ)

あゆみちしばぬ、ちゆよいむまさて

(歩ム路柴ノ露ヨリモ多ク)

しぢぬらちふふと、しぬでいくさちぬ

(袖ヲ潤ラシテ人ヲ忍ビ行ク先ノ)

はてやしらくむぬ、いちがなゆら

(果ハ白雲ノ如何ニナルヤラン)

○ゑらぶふし

としやたちかへて、はるぬそらはりて

(年ヤ立カエツテ春ノ空ハ晴レテ)

うしかじむた、ん、なみぬくむねらん

(風モ立タズ波ノ聲モナシ)

でかようみわらび、うしつりてたげに

(イデヤ童兒ヨ伴イテ互ニ)

はなむやいあしは、わかたつてあしは

(花ヲ採リ若菜ヲ摘テ遊バン)

(四) 口説

(クドキ)は、用語も句調も凡て本土式であるから、琉歌の中で最も解し易く最も新らしく種類も亦多く、主として琉球人と薩州人と同席の宴會に誦はれるものである、なるたけ薩の發音に従て謠ふを本則とす、例三、

○のぼり口説

旅の出で立ち観音堂、千手観音伏し拜がで、こがね約きて立別から、袖にふる露をし拂らて、をふご松原歩ゆみ行く、行けば八幡崇元寺、みゑじ高橋うち渡たて、袖を運ぬるもろ人の、行くも歸るもなかの橋、沖の寺まで親子兄弟、連れて別ゆる旅衣、袖と袖とに露涙、船のごも綱とくくご、舟子いさみて眞帆ひけば、風やまごもに午未、又のめぐりは御縁とて、招く扇やみゑぐすく、ざんば岬をあごになし、いへご立つ波をしそへて、途の嶋々見渡せば、七嶋ごなかや灘安すく、立つる煙は硫黄嶋、佐田の岬にはへ並らで、エイ、あれに見ゆるは御開聞、富士に見まごう櫻嶋、

山川やひつて鹿兒嶋までも

○くだり口説

さても旅ねのかり枕、夢のさめたる心地して、きのふ今日ごは思へごも、九十月なりぬれば、やがて御暇下されて、使者の面々皆揃て、辨才天堂ふし拜がて、いざや御假屋立出て、滞在の人々引列れて、かごやの濱にて立別ら、なごりをし出る舟子共、喜ひ

勇みて帆を上げぬ、祝の盃めぐる間に、山川港に走

入れば、船の改すんで又、碇ひきのせ眞帆引けは、

風やまごもに子丑の方、佐田岬もあごに見て、七嶋

途中もなだやすく、波路はるかに眺むれば、あごや

先にも供船の、帆引つれて走り行く、道の嶋々立つ

ゝき、伊平屋ごたつ波をしそへて、殘坡岬もはいな

らで、ありく、拜む御城下、辨の御嶽も打つゝき、

エイ、袖をつらねて諸人の、迎に出たや三重城、

親子引つれて首里にのぼる

○四季口説

扱も日出度や新玉の、春は心も若がいて、四方の山

邊の花ざかり

のごかなる世の春を告げくる谷の鶯サーッサ

夏は岩間を傳へ來て、瀧つふもごに立よれば、あつ

さわすれて面白や

風も涼しく袖に通いて夏もよそなる山の下影サ

ッサ

秋は尾花がう打招ぐ、園の眞垣に咲く菊の、花のい

ろく、珍らしや

錦さらさご思ふ許りに秋の野原や千草色めくサー

冬はあられの音そへて、軒端の梅の初花は、色香もふかく見てあかぬ  
花か雪かごいかで見わけん雪のふるへに咲やこの花サーッサ

第四章 俗謠

俗謠は、沖縄の都鄙、男女、老幼の間に行はるゝ歌を集めたもので、用語は現今の琉球語である

(一) 押大鼓ふし

田舎には、上古に(コチリ)、中古に(シノグ)といふ舞踊あつて、村の鎮守森の神を慰むるため、男女打つごい大鼓たたき歌い踊ることあつたが、今の(ウシデイク)といふのは恐らくは其遺風であらう、例二、  
ちごでししたいめ、うごいつちしゃべら、あまん  
ゆぬしぬぐ、うゆるちみしうれ  
(地頭代旦那様御取次イタシマセウ、昔ノ世ノ「しのぐ」御許シ下サリマセ)

あねへたやゆかて、しのぐしちあすて、わすたゆ  
になれば、うごめされて、

(姉女共ハ「しのぐ」シテ遊デヨカツタガ、我々  
達ノ世ニナレバ御止サレテヨ)

(二) 國頭さばくり

(クンチャンサバクリ)は、むかし首里王城の大普請に、  
國頭地方の百姓が、上納の用材を山から曳き出す時の  
木遣歌で、今は男女打交舞の歌になつてをる、其歌  
すゆいてんぢやなしぬ、うせむくだやびる

(首里王様ノ御材木デゴザル)

くんちんさばくり、にせたむいむぢやむ

(國頭木遣ノ男モ女モ)

なぐやまかしぢや、うなぢぬめいはた

(名護山仕事ハ鰻ノ肌ノヤウニ容易ニ)

うまんちまざりや、んなちむすれとて

(百姓共ハ皆々心ヲ合セテ)

よかふぬつぢや、ふだかちぢみよさめ

シッサー〜

(仕合ツゞキノ目出度キ御代デゴザラヌカ)

(三) 子守歌

琉球の婦女は一般に美音である、路傍に戯れ遊ぶ子守  
小女の、子をあやす歌なども頗る可憐で、行人の耳を  
傾けしむる(チャーム)がある、こゝに擧ぐる子守歌の  
詞は、現に首里那覇に行はれてをる方言である、

(一)

ヨイ〜ヨイ、ヨイ〜  
うんみーがーむいたちらわ、じたぐんさばぐんく  
まさなやー、ごーんやまごんあっかさやー

(姉サンガ守スルカラハ、下駄ヲモ草履ヲモ履カ  
セヤウヨ、唐ヘモ大和ヘモ歩カセヤウヨ)

(二)

ヨイ〜ヨイ、ヨイ〜  
うんみーがーむいたちらわ、ぬーちやーぬゆみなさ  
やー、かーらやーぬゆみなさやー、じんくらやーぬ  
ぬしなさやー、くみぐらやーぬぬしなさやー

(姉サンガ守スルカラハ、軒家ノ嫁ニセウヨ、瓦  
家ノ嫁ニセウヨ、金倉家ノ主ニセウヨ、米倉家

てたかや、

(天カラ落タ糸満人、幾人連レテ落タロカ)

みぢぢいぢりててたんど、をてたるごくるやまー  
やかや、

(三人連テ落タゾヨ、落タ所ハ何所ダロカ)

(二)

なん〜ぐしくぬ、うちうぬかぶいぬちぢぢぢぢ、  
(ナン〜城ノ御門ノ頂ノ尖端ゾ)

くまぬあんしめーや、うちむゆたしぢぬ、いちぐーが  
うたびみせーら、にんぐーがうたびみせーら、さだ  
みぐりし

(此所ノ旦那様ハ、御心善イカラ、一合下サルカ  
二合下サルカ定メガタイ)

サオエン〜サーサオエン、ピーラルララーラルラ、

(五) 流行歌

はやり歌は、一般に野卑であるを常とするが、往々無  
邪氣で滑稽なものもある、茲に擧ぐる其一は、田舎老人  
間に於て聞くもので、其二は曾て都鄙全体に流行した  
一種の踏歌である、用語は共に現在の方言である、

ノ主ニセウヨ)

ヨイ〜ヨイ、な〜くなよー

(三)

あんまーやー、まんくいがー、ゆうなぬしぢぢぢぢぬ  
まぢが、

(阿母ハ何所ニ行タカ、原ノ畑ニ芋掘リニ)

あんまがもうらわ、ち〜くち〜、し〜うがもうらわ、  
んむくち〜

(阿母ガ參ラバ乳ヲ上ダヤウ、阿父ガ參ラバ芋上  
ケヤウ)

(四) 童 謠

ヨイ〜ヨイ、な〜くなよー、

(一)

てんからをてたるいちまんぐ、いくたいちりてを

茲に擧ぐる其一は、島尻地方で得たもので、其二は國  
頭大宜味地方で聞たものである

(一) 徳 利

どつくいぐッよどつくいぐッ、まーからんちたうどつ  
くいぐッちぶやぬかまからんちたう、かれよしどつく  
いぐッ、

(徳利ヨ、何所カラ出タ德利カ、壺屋村ノ竈  
カラ出タ、目出度イ德利ヨ)

(二) 平良辻の茶賣

『テトトン〜』といふ蛇皮線の拍子につれて、(カ  
ミチャ)と(サンレ)と呼ぶ二人の田舎男が旅姿で一  
方より出る、同時に二人の妻女は他方より出る、  
四人差向いて足拍子とり、男と女と交る〜進み  
出て踊る、歌に』

女、すいなふアーにもーらわ、いたづらさけぬみち  
しみんそーれ、わたーすー、

(首里那覇ニ参ラバ、色ト酒トヲ謹ナサレ、我夫  
ヨ)

めーるうらぬしーわや、うりるやんど、みむちて  
いしつかんぬんど、

(参ル間ノ心配ハ、ソレデスヨ、身持ガ大切デス  
ヨ)

男、しわんすなばーちた、ちやうやんち、あちやぬぬ  
ふいさけいてちやうくと

(心配スルナ妻共ヨ、今日ハ行テ、明日ハ其足デ  
直グ歸テ來ルカラ)

女) ちゃんこいみーせら、てらんちじぬぶてがじまる  
ちしちやゆーゆし

(茶ヲ買ナサルナラ、平良辻ヲ上テ榕樹ノ下ニ)  
かちたゆてゐーちる、んみがちやからこーてめん  
それぬでんだ、

(影ヲ便リテ居ル、娘ノ茶ヲ買テオイデ、呑デミ  
ヤウ)

『これにて女共は引込む』

男、んみぐッちややかーわて、しいさあまさぬあさぬみ  
ーくわや

(娘茶屋ノ方ニ回テ番茶ヲ買フヤ)  
はなしするうーちに、すいんはいちよさかみちや  
ふ、でちやどぐんかい、

(話スル中ニ、首里ニ早ヤ來タヨ龜兄ヨ、イデ宿  
屋ニ行コウ)

『これにて男共は引込み、入代テ平良辻の美人

茶賣鶴女は、茶を盛た大笈を両手で頭上に捧  
げて出で來りながら』

鶴、わんどていらんちじ、ちゃんうゆるちるごやいび  
トしが、

(私ハ平良辻ニ茶ヲ賣リ居ル鶴デゴザイマスガ)  
どちうすくなーとて、ふいぐまちかいんちていち  
わごやるじにじなごーさ、

(時刻遅イカラ、ドレ早ク町ニ出テ行キマセウ、  
オヤ十二時ニナツテ居ルヨ)

『ご言テ、茶賣の鶴は宜き所に座る、男共は再  
び出て來テ』

男、ちやうやしますーがい、ちゃんこていかなかみちやふ  
いていらんちよ

(今日ハ歸ル序ニ、茶ヲ買テ行フデナイカ龜兄ヨ  
平良ニ出テサ)

しけんごゆまーれる、んみぐッしがたやかみかふご  
きか、エサさんれ、サツテモ、

(世間ニ評判ノ、娘姿ハ神力佛カ、オイ三良、ナ  
ルホド) 『ご言テ、茶賣に見される、茶賣は兩  
人に向ひテ』

鶴、ちゃんこいんせーら、うまさちやぬあくと、やく  
みたこーらに

(茶ヲ買フナラ、好イ茶ガアルカラ、兄サン達買  
ヒマセンカ)

『男共は茶賣の前に行テ』

男、ちいにちんーち、はなぬこーからかけてうみ  
しやうれ、でいねいらんさ

(一人ニ二斤宛、「花の香」ヲ目形カケテ賣ナサレ  
、代ハ幾ラデモヨイサ)

『茶賣は番茶二包を男共に渡す、男共は大

男、ちやうやしますーがい、ちゃんこていかなかみちやふ  
いていらんちよ

鶴、けいしむごしや、なまやねーらんしが  
(オツリガ、今アリマセンガ)

男、しまびーいさ  
(ヨロシイヨ)

『茶賣はソコ〜に笈を捧けて立上り、引  
込ながらに』

鶴、ちやうやふりむんいーちて、いーあちね、しちや

さふくやんかい、いちわごやる

(今日ハ馬鹿者ニ出會テ、好イ商賣シタヨ、ドレ早ク家へ行キマセウ)

『後に男共は、彼方に向ひて』

男、すいからや、なまごちうしが、やーやたんうらぬかや、ばーちーよ

(首里カラ、今戻ツタガ、家ニ誰モ居ランカ、妻ヨ)

『ご手を打てば、以前の妻二人出て来て』

女、いみんみー、みーけいし、まぢかにてうたさ、わたりすーいみそうれ

(夢ヲ見、夢ミ返シ、待カチテ居タヨ、我夫オハイリヨ)

『ご言て、イッ／＼と先に立て引込めば、男共は其後姿を指さして、手を振り頭を縮めて笑ひながらに』

男、んみぐッしがたご、ごじぬちご、みあわしんれば、エイ、さんれ、

(娘妾ト、妻ノヤツ等ト、比ベテ見レバ、オイ三良)

んみぐッしがたや、かみかふときか、たいがごじ、やちんむぬ、いるまっくる、しぶうーぢぬいる、アキサメサメ、

(娘子ノ妾ハ、神カ佛カ、兩人ノ妻ハ、焼芋ノ色ハ真黒、澁團扇ノ色、イヤハヤ／＼)

『ご言て、兩人揃て頭と手を横に振る』 (をわり)

### 第五章 戯曲

琉球戯曲の起原は、百八十餘年前の享保年間に在て、其の組織は全く本土の諸曲能樂に摸倣したもので、其脚色も到底幼稚たるを免れないけれども、兎に角、琉球固有の言語を以て琉球獨特の思想を發表したこと、琉球史上の口碑傳説が琉球の文士劇家に因て巧に詩化されたこと、琉球の人情風俗に關する半面はこの狂言を介して微妙に描寫されたこと等は、たしかに注意を喚起すべき價値がある、茲に琉球戯曲を分つて二とす、一を狂言といひ二を組踊といふ、

### (一) 狂言

琉球の芝居に演せられる狂言は、概して淫猥でなければ妖怪談で、到底見るに堪へんもの多數であるが、茲に擧ぐる一は、全く琉球式で、比較的忌味の無いものである、用語は現今の方言そのまゝである、

#### ○老若の縁組

『ドン／＼／＼と大鼓の音が聞へて、髻を額上に結び、衣裳をダラシナク着た、ヨイ／＼の馬鹿婿が出る』

#### 婿ごの

わんねー、○○按司ぬ次男、やまごややる、くごし三十五なごーしが、○○親方ぬうエなぐんぐッ、ちるーごいんぐみしまちあんでーせー、わー父親ぬ遺言やごちんご、ごないぬうばまーたぬで、くんりーぬせーすくさねーならぬ、

(我ハ、○○按司ノ次男、山戸デゴザル、今年三十五ニナツタガ、○○親方ノ女子、鶴ト縁組ノイヒナツケアルコトハ、我父親ノ遺言デアルカラ、隣家ノ叔母様ニ頼デ、婚禮ノ催促

#### セニヤーナラス)

『ご言て引込む、やがて叔母は出で、○○親方の家を訪ふことあつて、鶴子嬢の母に會ひ縁談を始める』

#### 母親

うエーうご、めんせーたるうち、やくすくぬあたんでちエーち、ヨーやびーしが、ちるんでなま十五ぬわらび、むーこんで三十五やくご、ごんごんごしぬちがて、しけんぬむぬわれーごなやびーれ、ごーでんくぬいんぐみー、ごいやみてんでうむごーやびーさ、

(我夫、存生ノ中、約束ノ在タノヲ承知シテ居マスガ、鶴ハ今十五ノ小供、婿ハ三十五デアルカラ、アマリ年ガ違テ、世間ノ物笑ニモナリマスカラ、ドウカ此縁組ハ、取止メタイト思テ居マス)

『ご言て拒む、サラバ無據ごて、叔母は歸て其由を婿ごのに話す、婿ごのは(ヂタンダ)踏で悔やしがり、今更斷られては、世間にも面目なし、この上は代官所に訴



へ出て、是非とも結婚せねはならぬと意氣まく、

あらたまつて、代官出て床几にかゝり、二人の供人従いて座る、やがて呼出に應じて婿ごの出で、代官の前に平伏して結婚の事を訴へる、そこで鶴子嬢の母も呼出され、代官の間に答へて』

母親

たしかに、うーうとぬ、やまごにちるーくゆんで、やくすこーししみしうちが、三十五と十五んで、ごごとしぬちがて、かんねるくごー、しきんにんねーらん、たうまんちぬむぬうれーごなゆらんで、うむやびーくご、ごーでんくぬいんぐみーごいやみてんでー、うむごーやびん、くりが半分ぬちげーんでごんやいびーれー、またうまーりんしやびーしが、

(タシカニ、我夫ノ、山戸ニ鶴ヲ吳レルト、約東ハイタシマシタガ、三十五ト十五デ、アマリ年ガ違テ、コンナコトハ、世間ニアリマセン、タダ万人ノ物笑ニナラント、思ハレマス)

代官

くり、ゆーちき、なま、むーくご、半分ぬちげーんでーごんやれー、がってんしゅんでー、いちやし、すごんちげんねんやー、

(コレ、ヨ一聞ケ、今、婿ト、半分ノ違デアルナラ、承知スルト、言タコトハ、毫モ偽デハナカラウナ)

母親

ウー、がってんやいびーしが、山戸や三十五、鶴や十五とやいびーくご、

(ハイ、承知イタシマセウガ、山戸ハ三十五、鶴ハ十五デゴザイマスカラ)

代官

ゆたしゅん、くぬいんぐめー、かにてぬやくすくぬやい、またなまうーなぐうやむ、がってんしゅる

くごやれー、まごーばいんぐみしみとびちーむんごー

(ヨロシ、此縁組ハ、兼テノ約束デモアリ、又今母親モ、承知シタコトダカラ、正當ニ縁組スベキモノゾ)

『ご殿そかに言渡せば、婿は之を聞いて雀躍して喜ぶ、母親は呆れ顔に、代官を見上げて』

母親

サリ、なまわーがいんぐみがってんしゅんで、みせーびたせー、うかんちげーやあいびらんかやー (モシ、今私ハ縁組ヲ承知シタト仰セラレタノハ、御間違デアリマセヌカ)

代官

よーしーき、すごんかんちげーやあらん、くり、ゆーかんげーてんれ、三十五と十五と、なまから五年せー、ちさなうゆんでうむゆが、 (ダマレ、少シモ間違デナイ、コレ、ヨク考ヘテ見ヨ、三十五ト十五ト、今カラ五年過ギタラ、幾ツニナルト思フカ)

母親

四十と二十とでーびる (四十ト二十トデゴザイマス)

代官

四十と二十と、半分ぬちげーやあらに、 (四十ト二十トハ、半分違デナイカ)

『母親は茫然として、答ふる辞もなく平伏する、婿ごのは頓狂な聲を揚げて、(四十と二十ハ半分)、と幾度も繰返して、頻に代官に御辞儀をする、之で皆々引込む、いよく嫁入となつて、頭から(カツギ)を被つた花嫁が迎へられて来る、やがて祝宴も済んで一旦静になる、婿ごのは、異様な顔をして出て来り、腕をくみ首を傾けて頻りに何か考へながら』

婿ごの

みーゆみぬ鶴や(ちやーしんちウはぢらん、ごーてーやまぎさい、ふいさねーきーぬみーごい、ごごーふしちなむのー (花嫁ノ鶴子嬢ハ、ドーシテモ(かつぎ)ヲ脱ガ

ス、身体ハ大キイ、脚ニ毛ガ生テオル、ヨホド不思議ダ」

「なごも、獨語して、再び代官所に訴へ出る、代官は部下を遣て検査する、花嫁は、實は鶴子嬢でなく、嬢の家の下男が、主人の命によつて、替玉として来たことが發覺する、そこで母親と鶴子嬢と下男とは、代官の前に呼出されて、厳しく叱られる、これでをしまい」

(二) 組踊

組踊の起原は、享保年間尙敬王の代に在りて、清國冊封使徐葆光は其著中山傳信録に此事を記してをる、當時組踊の作者は玉城親方朝薫といふ人で、其作五番、今に之を五組と稱して組踊の基礎としてをる、即ち其一は、二童敵討又は鶴龜復讐といつて、琉球中山の忠臣毛國鼎護佐丸の遺孤が、父の仇阿摩和利を討取たことを叙し、其二は、執心鐘入又は鐘魔といつて、一女子が中城若松といふ少年に戀して魔となつたことを述べる

たもので、道成寺の擬作である、其三は、女物狂又は人盜といつて、梅若と高野物狂との焼直しである、其四は、銘苅子といつて、琉球の羽衣物語である、其五は、孝行の巻である、概して本土の謠曲に摸したものであるが、爾來組踊を作るもの陸續として出で、今日では其種類殆んど百を以て數ふべきである、就中、傑作として聞へてをるのは、平敷屋朝敏の作なる「手水の縁」一名「波平山」で、波平大主の一子山戸といふ青年と、知念山口森小屋の一女玉松との戀愛を寫したものの、與那原良矩の作なる「花賣の縁」一名「森川の子」といふのは、森川子といふ一士が、故あつて身を花賣に貶し、深く田舎に隱遁せるを、妻子は遙々首里から尋ね來て邂逅することを描いたもの、其他「義臣物語」一名「國吉比屋」は、南山落城後に高嶺按司の遺孤を奉じて恢復を圖り、單身首里城を燒崩さんとして捕へられ、鮫川按司は深く其忠烈を嘆美して、高嶺若按司に地を與へ家を起さしむるに至ることを叙し、「天願の若按司」、「二山和睦」なども、可なりの作で共に皆多少の事實談である、茲に「波平山」を紹介す、用語は凡て、今の雅語である、

○ 手水の縁、一名、波平山

第一段

歌

はるなぬんやまゆいぬはなざかい、いちよしぶるすぢぬにうぬしよらさ

(春ヤ野モ山モ百合ノ花盛リ、行キ沿ヒ觸ル、袖ノ匂ノシホラシサ)

「樂屋カラ此歌ヲ(ンヂハ)節ノ蛇皮線ニ合セテ優ニ謠ヒ出セハ、若衆姿ノ山戸ハ、日傘ヲ携ヘ、歌ニツレテ静々ト舞台ニ現ハレ、ヨキ所ニ立留リテ」

山戸

わんやしまじいぬはんちやうふぬしぬちういぐやまごよ、ちやうやかみしむんあしぶさんがちぬみち、うすかじんしださしながやまぬぶて、はながめしらにはなごやいあしは

(我ハ島尻ノ波平大主ノ一子山戸ヨ、今日ハ上モ下モ遊ブ三月ノ三日、軟風モ涼シケレバ砂川山ニ登テ、花ヲ詠メ花ヲ採テ遊バン)

「歩ミ出シ景色ナガムル狀ニテ、ヨキホドノ

所ニ至リ

山戸

せけにこゆまへるしながやまんれば、はなやさちぢらさきにうむしよらさ、くまんあしゆごてながめぶさぬ

(世ニ名高キ砂川山ヲ見レバ、花ハ咲テ美シク匂モ亦シホラシ、此所ニ足ヲ留メテ詠メタイモノ)

「ト言ナガラ片膝立テ、坐ル、此時」

歌

わかなつがなればくさるうかさへてはんちやたまがわにかしらあらな

(若夏ニナルバ心浮サレテ、波平玉川ニ頭洗ハシ)

「ト(ンヂハ)節ニテ樂屋ヨリ聞ユル、此歌ニツレテ、娘姿ノ玉松ハ小柄杓ヲ携エ静々ト踊リナガラ舞台ノヨキ所ニ現ハレ出テ立留マリテ」

玉松

なまんちるわんやちんにんやまくちぬ、むいぐやぬ

ちいぐつたまちごやよる、さんがちがなへばくゝるうかさへて、はんちやたまがわにかしらあらな

(今出ル我ハ知念山口ノ、森小屋ノ一子玉松デゴザル、三月ニナレバ心浮サレテ、波平玉川ニ頭洗ハナ)

歌

はんちやたまがわぬながりゆるみじにしだくゝごかしらあらてむごら

(波平玉川ノ流レオル水ニ涼々ト頭ヲ洗テ戻ラシ)

ト又モ(ハヤチクタン)節ノ歌ニツレテ玉松ハシトヤカニ髪ヲ洗フ様子ヲシテ踊リナガラ歸リカケル

山戸

はなむながめたい、いすちむごら  
(花モ詠メタリ、急ギ戻ラン)

ト此方ノ山戸ハ立上リ少シ歩ミ出シテ不圖玉松ヲ見ソメ近ヅキテ言葉ヲカケ

山戸

(昔ハ手ニ掬ンダ情カラ出テ、今ニ流レ居ル許田ノ手水)

コレハ許田川ニ水ヲ掬ヒテ男女ノ情ヲ通シタ故事ヲ述ヘテ、玉松ニ情ヲ寄スルナリ

玉松

みじしらすさごめ、てみじですしらん、あてなしよてむぬゆるちだほり

(見モ知ラス郎君ニ、手水ナド上ゲルコト存ジマセヌ、何モ分リマセンカラ御免ナサレ)

山戸

ちゆでんしくだてくさごゑんむしぶ、んじてみじぬまんむごていかゆへか、ごてんくぬかわにわみやしちら

(露デスラ降リテ草ト縁結ブモノオ、嬢ノ手水ヲ呑マズニ戻リ行カンヨリモ、迎モノコトニ此川ニ我身ヲ捨テン)

情迫リタルサマニ早言ニ述ベテ川ニ身ヲ捨テヨウトスル

玉松

ヤーをみんじよよ、あまいみじぶさぬやしまらんあむぬ、んじよよをなさけにぬまちたぼれ

(ヤー戀シキ嬢ヨ、アマリ水ガ欲シクテ堪エラレマセヌカラ、嬢ヨ御情ニ呑マセ給ハレ)

山戸

ふいしくからたべるなさけごんやらば、ごてんぬみぶさやんじがてみじ

(柄杓カラ給ハルホドノ情アルナラバ、迎モノコトニ嬢ノ手水ヲ呑ミタシ)

玉松

みじぶさやなざきたふふりごやよる、よすぬみぬしちさいすちいぢゅん

(水ガ欲シイナドニカコツケテ戯ナサルカ、人目繁シイカラ急ギ行キマス)

山戸

んかしてにくたるなさけからんちて、なまにながりゆるちだぬてみじ

ぬちしちるぶごぬくごよまたやらば、やぐさみよあてごてみじあげら

(命捨ルホドノコトナラバ、耻カシナガラ手水ヲ上ゲマセウ)

山戸

ト玉松ハ慌テ、山戸ヲ抱キ止メ、ワリナク茲ニ手掌ニ水ヲ掬ヒテ山戸ニ呑マセル

アトト、くぬかわにたよてみじぬむくごや、てんぬをたしけか、かみぬふいぢわしか、んじやをごにち、うゆぶちにんやまぐちぬ、むいぐやぬなしぐつたまちごやよら、やみぬよぬからしなかんむぬしよめ、いわばち、たほりかじならんわんや、はんちやうふぬしぬなしぐやまごよ、んじがなよかたりしめいやごちかち、よすぬみをかくちまたんをかま

(アト難有シ、此川ノタメニ手水ヲ呑ムハ、天ノ御助カ神ノ引合カ、嬢ハ音ニ聞及ブ知念山口ノ森小屋ノ息女玉松ニテアラン、暗夜ノ鴉ハ鳴カチバ知ラレヌ、モーシ聞キタマヘ數ナラヌ我身ハ、波平大主ノ息子山戸デスヨ、嬢ノ

名ヲ語ラレヨ住所ヲモ聞カセラレヨ、人目隠レテ又モ會ヒマセウカラ)

玉松

ふいごまげやあらねみじしらすさごめ、うちよでししらんこいぬんちしらん、あてなしよでもぬゆるちたばり

(人違デアリマセヌカ見モ知モセヌ郎君ヨ、浮世デサエ知ラヌモノ戀ノ路ナドハ知リマセン、何モ存ジマセンカラ御免下サレ)

山戸

アケヨ、じよならんくごよまたやらば、にうエやでんすじにうつちたばり、をむかぢやしでぬみやちさべら

(ハテサテ、儘ナラヌコトモアリマヌナラバ、セメテ匂デモ我袖ニ移シテ給ハレ、御姿ノ悞ヲ死出ノミヤゲニシマセウカラ)

玉松

かくちかくさらんに、またあらわへて、めせるぐごわんやちにんやまぐちぬ、むいぐやぬなしぐつたまちごやよる、をがみぶさあてんなゝゑまし

うちに、ちばでゐるはなぬそとにゑだんぢち、はなさちゅるくごむあいがさびら

(隠ソウトスレバ又現ハレテ、仰ノ如ク我身ハ、知念山口ノ森小屋ノ女玉松デゴザイマス、御會マウシタクモ七重ノ籬内ニ荅テ居ル花ガ、ドウシテ外ニ枝ヲ出シテ花咲クコトモアリマスカシラン)

山戸

ヤーをみんじよよ、いかなてんぢくぬうにたちぬうじょうむ、こいぬんちやればあけごしゆる

(ヤー戀シキ嬢ヨ、如何ナル天竺ノ鬼ガ立番シテ居ル御門モ、戀ノ路ナレバ開ケマスルヨ)

玉松

ヤーをみさごよ、くぬかわぬなれやふいごしぢさあむぬ、いすぢたちむごてまたんをがま

(ヤー戀シキ郎君ヨ、此川ハ人目多イ習デスカラ、急ギ立戻テ又ノ時ニ會マセウ)

山戸

わかりよるすぢに、にうエうつちたばり、にうエぬあるうたやごぢにさびら

(別ル、袖ニ匂ヲ移シ給ハレヨ、匂ノアル間ハ伽ニシマセウカラ)

玉松

あさゆみにかけるなりすみぬくそぢ、めぐりあふうたぬごぢにみそれ

(朝夕身ニ掛ケル馴染ノ小袖、メグリ會フ間ノ伽ニナサレマセ)

山戸

やくすくよたげていちぢわりよするな、ちうやたちむごてまたんをがま

(約束ヲ違エテ偽ナサルナヨ、今日ハ立戻テ又御目ニカ、リマセウ)

『此時ニ玉松ノ赤染手巾ト山戸ノ日傘トヲ互ニ取り替ハシ、山戸ハ手巾ヲ肩ニカケ玉松ハ傘ヲサシテ、兩人双方ニ思ヲ殘シ振リ歸リ見ナガラ静々ト(チュンジュン)節ノ歌ニツレテ舞台ノ左右ニ立別レル』

歌

わかれてんたげにぐゑんあてからやいごにぬくはなぬちりてぬちよめ

(別レテモ互ニ御縁アッタナラバ糸ニ貫ク花ノ散シ去ルモノカ)

○ 第二段

歌

しぬでいくくゝるよすやしらねごむすぢしかほかくすくいぬなれや

(忍テ行ク心ヨソヤ知ラテドモ袖デ顔カクス戀ノ習ヤ)

『ト云フ(ンデハキン)節ノ歌ニツレテ、山戸ハ編笠ヲ冠リ短刀ヲ脇挟ミ日傘ヲ携サへ、忍姿デ舞台ノ一方ニ現ハレ出テ』

山戸

てみじしるなさけをむいありかみ、いつわいぬにうたぢがしんち、くいにふみまゆてくがれしぬくごや、んかしむぬがたいよすぬうごぢよる、いとやなちゑだにさくらはなさかち、うめぬにうたつるんじがをなさけぬ、はんじがわてみじむねにぬみしみて、やみぬよるひるむねむ

るよむねらん、ごいごむるごむになきあかちをれは、あさゆわがすぢやなみしちやぬふいしか、かわくまやねさめぬれるしんち

(手水シタ情ハ思アリ鏡、偽ノ匂立ガ心配、戀ニ踏迷テコガレ死ヌコトヤ、昔物語ニ他人ノ上トゾ聞キオル、糸柳枝ニ櫻花ヲ咲カセ、梅ノ匂立ツル嬢ガ御情ノ、波平川手水ヲ胸ニ吞シミテ、暗ノ夜晝モ眠ル夜モナシ、鳥トモロ共ニ鳴アカシオレバ、朝夕我袖ヤ波下ノ干瀬カ、乾ク間ヤ無シ、スレル心配)

歌

ぬやまくゆるんちやいくりふいざみてんやみにたふふごいしぬでいぢゅん

(野山越ユル路ヤ幾里隔ツトモ暗ニ只獨リ忍ビ行カン)

『トイフ(ミチユキ)節ノ歌ニツレテ、山戸ハ歩ミ出シ、舞台ノ奥ニ優カシク聞ユル琴ノ音ヲ便リニ忍ヒ寄り、自ラ腰ノ横笛ヲ吹キスサミテヨソナガヲ琴ノ曲ニ合セ、此時ニ奥ノ琴ノ音ハタト止ム』

山戸

やみぬよぬふごむねしまいてうれは、をぢにんぢみそれをがみぶさぬ

(暗ノ夜ノ人モ寢静マリテオレバ、御門ニ出ナサレ御會シタシ)

『ヤガテ奥ヨリ、琴爪ヲ指ニ箱メタ玉松、ツト走り出テ、舞台ノ一方ニ立留マリ、思詰メタサマニテ、ソレトナク周圍ヲ見マワス、此時ニ人ノ足音ヲ聞タ山戸ハ、用意ノ短刀ヲ拔放シ片膝立テ、身カマエル、之ハ忍ノ法ニテ、イザ露見トイフ時ノ覺悟ナリ。』

玉松

やみぬよにふいぢゅいごめてめるくゝる、かにてしるわんやをまちぐれしや

(暗ノ夜ニ一人尋テ參ラル、心、カ子テ知ル我身ヤ御待苦シヤ)

『トイフハ正シク玉松ノ聲ト知リテ、山戸ハ刀ヲ收メ笠ヲ脱ギ走り寄りテ、玉松ノ肩ニ輕ク手ヲカケル』

山戸

ヤー、んみんなじよよ、をむかぢぬにうゑたちまさいまさて、くらさらんあてごごめてち、やる

(ヤー戀シキ嬢ヨ、俯ノ匂立マサリマサリテ、堪エラレンノデ、尋ネ參リマシタ)

玉松

ヤーんみささよ、くまやふいごししやさうちにいりみそれ、あわれくぬうたぬうむいかたら

(ヤー戀シキ郎君ヨ、此所ハ人目多ケレバ、内ニ入ナサレ、アワレ此間ノ情思語ラバヤ)

『シバラク兩人ハ舞台ニ坐リ、肩ニ手ヲカケ合ヒテ、アイノ傘ノ中ニ懐シサアマル風情ヲナス、ヤガテ立上リ手ニ手ヲ取リテ』

歌

たげにくぬうたぬをむいかたら  
(五ニ此頃ノ情思ヲ語ラバヤ)

『トイフ(チュンジュン)節ニツレテ奥ニ入ル、此間ハ樂屋ニテ』

歌

戯曲組踊

むすであるちやりくぬよまでをもて、かわるなよたげにあぬよまでん

(結デアル契ハ此世マデトモ、替ルナヨ互ニ彼世マデモ)

『ト(シツクイ)節ニテ静ニ歌フ、姑ラクシテ山戸ハ、慌シク走出テ、續イテ夜番ノ男モ出テ來ル』

夜番

たるか、よふかさにごぬちふみいよし、なぬよらはなぬれ、ちりくるちしちら

(誰カ、深夜ニ殿内フミ入りナドスルハ、名乗リ得バ名乗レ、斬リ殺シ捨テン)

『ト夜番ハ荒々シク大音ニドナル、山戸ハ振り向キ、屹トナリ刀ニ手ヲカケテ』

山戸

あたらはらたちにあわてるなをさご、はなぬうエぬはべるちやぬなよめ、やみにたごふいぢゅいしぬでくるばかい、なさし、よめばんでくゝるあるわんぬ、かゝよらはかゝれちりくるちしちら  
(アキラ腹立ニ慌テルナ男、花ノ上ノ胡蝶ハ禁

止ナルモノカ、暗夜ニ只一人忍デ來ルグライ  
ニ、名乗ルモノカ番手ヨ決心セル我身、カ、  
リ得バカ、レ斬リ殺シ捨テン

夜番

こいぬましばんてしるむぬやあらん、でいじさら  
めわんやいすぢぬげら

(色懸ナドノ番人スルモノヤアラウヅ、危シ

く我ハ急イデ逃マセウ)

『トテ夜番ノ男ハソコノ内ニ入ル、後

ニテ山戸ハ心配ノ様子ニナリ』

山戸

むじごわがなかぬしのぬがあらわりて、あぢやん  
じょしみのあよらごめば

(嬢ト我トノ中ノ忍ブ戀ガ現ハレテ、明日ハ嬢

ノ折檻アラント思ヘバ)

『ト頻ニ玉松ノ身上ヲ氣遣ヒツ、樂屋ニ

聞ユル次ノ(サンヤマ)節ノ歌ニツレテ、

思ニ沈ミナガラ引込ム』

歌

あらしぐぬあらばんじょふいごいなしめ、わんむ

もるごむにならんしむぬ

(嵐聲ノアラバ、嬢一人ニサセウヅ、我モ諸共  
ニナランモノヲ)

第三段

『森小屋大主ノ頭役ナル志喜屋大役ハ、嚴メ

シキ帯刀ニテ現ハレ出ル、續イテ若党ノ山

口西掟モ出テ、兩人舞台ノ一方ニ立止マリ』

大役

でようちるむぬや、むいぐやぬをふぬしぬかし  
らやくち、るしちやぬをふやく、ハ一をふぬしぬ  
をみぐつはなぬたまちいご、さるち、ぬみちやはん  
ぢがにをりて、かしらあらなざきはんぢやま  
ご、こいしぬぶくごぬよすにあらわりて、かく  
すかたならんしけんくちぢぢに、しらんふぬあ  
ごてちにんばまんじて、ちかたなにくるちた  
いまぬごへんじうんにけてやい、ちむぐるさあ  
てんにまたちぬさりか、をふしごまよにしら  
なよめ

(罷リ出タル者ハ、森小屋ノ大主ノ頭役承ワル

志喜屋ノ大役、ハ一、大主ノ令嬢花ノ玉松コソ

、去月ノ三日波平川ニ下テ、頭洗ニ托シテ波

平真山戸ト、戀忍ブコトノ他所ニ露ハレテ、

隠ス方ナラン世間口舌ニ、知ラレン日ニ知念

演出テ、一刀ニ殺シ急ニ御返事申上ヨトヤ、

心苦シサアレド又如何ニサレヤウゾ、仰ノ如

クニセニヤナルマイ

西掟

ア一、めせるごと、わんむもかくちかくさんて  
しよしが、わんぬをふぬしにしらんふぬあらは、  
ちむぐるさあてんしならなよめ、あたらはなさか  
りつぼでゑるうちに、ちゆぬたまちらすくごめう  
らめし

(ア一、仰ノ如ク、我モ只管ニ隠サントセシガ

、大主ニ知ラレタ日ニハ、心苦シケレドセニヤ

ナリマスマイ、アタラ花盛リヲ答デ居ル内ニ

、露ノ玉散ラスコトノ憾メシヤ)

大役

ヤーにしんち、いすぢまだまちをこむしちうれ

(ヤー西掟、急ギ真玉松ヲ御供シテ參レ)

西掟

をがんちよびやびて

(カシコマリマシタ)

『西掟ハ内ニ入リ、ヤガテ白装束ニ髪モ長

ク後ニ垂レテ、屠所ノ羊ノソレノ如ク萎

レタ姿ノ玉松ハ、静々ト現ハレ西掟ハ後

ニツイテ出テ』

西掟

ヤーをみぐつ、きわめたるくごぬにまたちやぬな  
よか、く、るやし、ごあぬよいもれ

(ヤー令嬢ヨ、決定シタ事ハ又如何ニナリマセ

ウゾ、心安々ト彼世ニオイデナサレ)

玉松

しちるわがいいぬちゆふごむをまん、ぬくるをみ  
さごやいちがみせら

(捨ル我命ハ露ホドニモ思ハヌガ、後ニ殘ル戀

シキ郎君ハ如何ニナサルヤラ)

『ト思沈メバ、此時ニ樂屋ヨリ次ノ(コモ  
チ)節ノ長歌聞ユル』

歌

さごとわがなかなぬしぬびあらわりて、にまたじよならんしでがやまんちに、さごめふりすてよいちるちわでむぬ、くいぬうじがみぬまくごんやらば、たまこがねさごにしらちたばれ

(郎ト我トノ忍事露ハレテ、ドーニモ儘ナラズニ死出ノ山路ニ、郎君ヲ振捨テ、行ク最後ナレバ、戀ノ氏神ガ誠ダニアラセラルナラ、戀シ懷カシノ郎君ニ知ラシテ給ハレ)

『此時、舞臺ノ一方ニ、山戸ハ憂ニヤツレタ姿ニテ、次ノ(シチシヤク)節ニツレテ現ハレ出ル』

歌

アケヨ、たまちやくるさりて、やい、ごめてむるこむにならんしむぬ

(嗚呼、玉松ハ殺サレントヤ、尋チテ諸共ニナランモノオ)

山戸

あわり、たまちやくるさりて、やい、ごめてむるこむにならんしむぬ、よすつげぬあごてな

まごわち、ヨる、むじよよさちだて、しけにゐてぬすか、ごめてむるこむにならんしむぬ、ごなかかやよらくるさりかしちら、ちむいすちあよでいちめをがま

(アワレ玉松ヤ他見ヲ憚カリテ、知念濱ニ出テ殺サレントヤ、他人ノ告アツテ今ゾ我ハ聞ケリ、嬢ヲ先タテ、此世界ニ居テ何カセン、尋チテ諸共ニナランモノオ、途中カヤラ殺サレヤシツラン、心急ギ歩ミテ生前ニ一自會ハシ)

『此方ニテハ大役ト玉松ト西掟トハ、歩ミ出シテ舞臺ノ一方ニ坐ヲ占メル』

大役

ちになばまち、ヤん、よかごくるいらで、よすめねんうちにいすちすまし

(知念濱ニ着イタ、ヨキ所撰ンテ人目ナキ内ニ急ギ濟マサン)

西掟

をがんち、みやびて  
(カシコマリマシタ)

『西掟ハ立チテ、玉松ヲ舞臺ノ中央ニ坐ラセル』

玉松

ヤ、しちぬをふやくやまぐちぬにしんち、くぬよふりすてく、いちるちわでむぬ、はじむふりすて、いはち、たぼり、いきよりばくるさしなばわすれよい、かたごちんあぬよいすちぶさあしが、またんくぬせけやをがまんやれば、あまりをむくごぬつくさらんあしや、しぬるわがいぬちつゆふごんをまん、さごにいぐごばぬちにか、てをむぬ、ヤ、しちぬをふやく、ヤ、にしんちよ、さごやはなさいふち、まさいやれば、をしながなしみやだりよるひるむみそち、てんぬをさだめぬくだてくるしつや、しでがやまんちにをまぢさびらてやい、たまこがねさごにかたてたばれ、むしかわがいぐんそむちめるやらば、まくごあぬせけぬくよごあれば、んちてさごいきめみらんはずでむぬ、くまくまごむねにしみてたばれ  
(ヤ、志喜屋ノ大役山戸ノ西掟、此世フリ捨テ、行ク際ダモノ、耻モフリ捨テ、言ハソコト

聞キ給ハレヨ、生き居レバコソ苦シケレ死ナバ忘ラレン、片時モ彼世ニ急ギタケド、又モ此世界ガ見ラレヌコトナレバ、アマリ思コト多クテ盡サレス、死ヌル我命ハ露ホドモ思ハスガ、郎君ニ傳エル言ノ氣ニカ、リアルモノオ、ヤ、志喜屋ノ大役、ヤ、西掟ヨ、郎君ハ花盛リ人ニ勝レテ居ラルレバ、御主様御奉公夜盡モナサレテ、天命ノ下リ來タ時ニハ、死出ノ山路ニ御待申シマスルト、戀シキ郎君ニ語テ給ハレヨ、若シモ我遺言背キナサルナラバ、眞ニ彼世ハ此世ノ如クアラバ、出テ、郎君ニ會ヒ見ヌツモリト、委細ニ郎君ノ胸ニ傳エテ給ハレ)

大役

めせるいくごばやさごちむにふかく、よすぐごやはかてかたるはずでむぬ、くぬくごやうひむをきづけよめすな

(仰シヤル言ハ郎君ノ胸ニ深く、人目ヲ避ケテ語ルツモリテ御坐リマスレバ此コトヤ毫モ御氣遣召スナ)

大役

『ト言終リ、大役ハ涙拂ヒテ西掟ニ向ヒ』  
ヤーにしんち、ごちうつちすまんいすぢすませ  
(ヤー西掟、時刻移リテハ相濟マス、急ギスマ  
セ)

西掟

をがんちびやびち

『西掟ハ立カ、リ、玉松ノ後ニマワリ、大  
刀ヲ抜キ放シ身構シテ、片手ニ玉松ノ髪  
ノ毛ヲ押シノケ、斬ラントシテハ躊躇シ  
テ』

西掟

ハ、あさゆむいすだてしたるわがをみぐ、ま  
くごちかたなにちゆるしぬばらん、たんでをふ  
やくちばてたばれ

(ハ、朝夕守リ育テシ我が御子、マコト一  
ニ斬ルニ忍ビヌ、ドーゾ大役氣張テ給ハレ)

大役

ハ、をうせぐとやればごちうつすまん、かた  
ごちんはやくいそげ〜

歌

(ハ、主命デアレバ時刻移ツテスマヌ、片時  
モ早ク急グ〜)

アケヨ、もりそたてしちるわがをみぐ、ぎり  
やいいちんもみしなしヨカ

(呼乎、守リ育テシタル我が御子義理デアルト  
言タトテ何トシテ)

『トイフ樂屋カラナル(アガリエ)節ノ歌ノ  
中ニ、西掟ハ幾度モ刀フリ上ゲテハ斬リ  
兼子テ居ル、所エ山戸ハ走り寄り、白刃  
ノ下ニ身ヲ投ゲテ玉松ヲカバイ』

山戸

ヤーラみんじよよ

(ヤー戀シキ嬢ヨ)

玉松

ヤーラみさごよ

(ヤー戀シキ郎君ヨ)

『次ノ(アガリエ)節ノ歌ハ此時又モ聞ユル』

歌

アケヨ、いちがししょうら

(呼乎、如何ニシヤウヤ)

西掟

イヤ、かたなはにさわるむんやぬんやるむぬか  
(イヤ、刀ノ邪魔スル者ハ何モノカ)

山戸

あわれ、しりみそれいへばち、たばれ、かすなら  
んわんやはんちやをぬしぬなしぐやまごよ、あ  
まいむいぐや、ちりだてぬまぎさ、いかなてんち  
くぬをにたちぬうちむ、こいぬんちやればあけ  
ごすよる、ヤーしちやぬをふやくやまぐちぬにし  
んち、ちりむごわりむき、たて、たばれ、んか  
しむぬかたいむ、つたへち、ん、こいしぬぶくご  
やせけにあるなれい、むぞうさよみそちかなしさ  
まみそち、せけんさいさたぬさいごまるうたや、  
む、かくしかくちしらんくごしむぬ、たまちが  
いぬちわんにくれてたばれ、たんでじよならんく  
ごよまたやらば、わんむもるごむにくるちたばれ

(アワレ知リ召サレヨ言エバ聞キ給ハレヨ、數ナ

ラス我ハ波平大主ノ一子山戸ヨ、アマリ森小  
屋ヤ義理立ノ堅サヨ、如何ナ天竺ノ鬼立ノ御

大役

門モ、戀ノ道ナレハ開ケルモノオ、ヤー志喜  
屋ノ大役山口ノ西掟、義理モ理由モ聞立テ、  
給ハレ、昔物語幾ラモ聞ク、戀忍ブコトヤ世  
間ニアル習、憐レト思召テ愛ラシト思召テ、  
世間取沙汰ノ止ム間ハ、只管ニ隠シテ知レン  
ヨウニスルカラ、玉松ノ命ハ我ニ呉レテ給ハ  
レ、タッテ叶ハヌコトモアラバ、我モ諸共ニ殺  
シ給ハレ)

ヤーにしんち、をみつけるくごぬわんにまたあよ  
ん、こいしくぬせけにあるむぬごやよる、ふい  
ぬくちしちむごちぬまごやよる、せけんさいさた  
ぬさいごまるうたや、またまちがくごやまやま  
ごにわたし、くるちちびたんでやいにんにけ  
てをいて、あご〜にならばをちむごいなをち、  
またよにんちちはなさかちしらに、たまぬいご  
ぐるんしよぬでむぬ、わんぬいへるごごなれてた  
ばれ

(ヤー西掟ヨ、思ツケルコトコソ我ニアレ、戀  
ハ此世界ニ在ルモノゾ、人ノ口舌モ時ノ間ゾ



ヨ、世間取沙汰ノ取止マル間ハ、眞玉松ノコトハ眞山戸ニ渡シ、殺シテ参リマシタト申上テオイテ、後々ニナラバ御機嫌取直シテ、又世ニ出シマイラセテ花ヲ咲カセ、玉ノ御縁ヲ結ハセンモノオ、我ノ言エル如クニ同意シテ給ハレヨ

西掟

めせるぐこ、あごくにならばをちむこいなうち、たまぬいごぐゑんむすびぶさぬ

(仰ノ如ク、後々ニナラバ御機嫌取直シテ、玉ノ糸ノ御縁ヲ結ビタクゴザル)

『ソコデ西掟ハ刀ヲ收メテ大役ノ次ニ居直ル』

大役

ヤー、まやまご、んれはちむぐるしさむぞうさやをみぐつ、まくごちかたなにもちむぬしぬばらん、またまぢがいぬちわたすはづでむぬ、いすぢひちつれてしぬでいもれ

(ヤー眞山戸、見レハ心苦シサ憐レサ御嬢、マコト一刀ニ斬ル心ニ忍ビス、眞玉松ノ命ヲ渡

シマスカラ、急ギ引連レテ忍デ参ラレヨ)

山戸

アトトト、たどくるぬかぢにたいがぬちしくて、くぬぐらんぢやいぢやうくりやびか、をむくごやあまたかたらいふさあしが、やがてよやあちるよすしれてすまん、ぐらんをなさけやあごにをくりやびら

西掟

(アー忝ナシ、御兩所ノ御蔭ニ二人ノ命救ハレテ、此御恩義ヤ如何シテ送リマセウカ、思コト數多語リタクアレド、ヤガテ夜モ明ルカラ他人ニ知レテハ濟マス、御恩御情ハ後ニ送リマセウ)

大役

やーをみぐつ、ヤーマやまご、いみふごんよすにあらわれてからや、わたみぬうにでいじあらんすむぬ、よふかさるうちにいすぢいもれ、トートー、いすぢいもれ

(ヤー御嬢、ヤー眞山戸、夢ホドモ他ニ露ハレタナラバ、我等身上ノ大事デアリマスカラシテ、夜深キ内ニ急ギ参ラレヨ、サーく急ギ

参ラレヨ)

山戸

ヤーをみんじよよ、んじよごわがなかぬしぬびあらわれて、ふちみまごわけてくるされんてやい、よすつげぬあごてごめてちよる、をむくごやかなていきめいちる、つれていくごやいみかやよら

(ヤー戀シキ嬢ヨ、嬢ト我トノ忍アラハレテ、人目憚リテ殺サレント、他ノ告アツテ尋テ来マシタ、思コト叶テ生前ニ會ヒ、連レテ行クコトヤ夢カシラン)

玉松

ヤーをみさごよ、わんむをむくごんいわんつくさらむ、ごいむなちしみてよむやがてあちる、よふかさるうちにいすぢちむごら

(ヤー戀シキ郎君ヨ、我身モ思事モ言ツクサレマセヌ、鳥モ鳴キ初メテ夜モヤガテ明ケマスルカラ、夜深キ内ニ急ギ立戻リマセウ)

歌

ごいむなちしみてやがてよやあちる、よふかさ

和文及和歌

るうちにいすぢちむごら

『トイフ(アガリエ)節ノ歌ニツレテ山戸ト玉松トハ一方ニ大役ト西掟トハ他方ニ引込ム、之ニテドンくニナリ、オシマイ』

第六章 和文及和歌

琉球人にして和文と和歌とに堪能なるものを挙げよといは、何人も先づ指を平敷屋朝敏に屈することに躊躇せぬであらう、朝敏は享保年間なる尙敬王の琉球黄金時代に出で、當時の執政蔡温に反抗して安謝湊に斬首せられた人であるが、其富麗なる詞藻は其数奇なる境遇と相待て後世に喧傳せられてをる、其遺稿として、貧家記、苦の下、万歳、若艸、等は僅に今に存す、又、近代の歌人としては、宜野灣親方朝保を推さざるを得ない、朝保は琉球の名族で、職を外國御用係等に奉じ、安政年間以來支那に使用すること二度、本土に使用すること六度、薩州に於て歌人八田知紀等に交を結たこのことである、明治五年慶賀副使として東京に來り、吹上離宮の御歌會に陪し、御兼題當坐を詠進して

叙感を蒙る、水石契久、紅葉如醉、の二首之である、(タドキ)節の「上リ口説」、「下リ口説」及「四季口説」も亦朝保の作と傳へられてをる、當時中山王を改て藩王となすの事あるや、琉球が速に朝命を遵奉したのは朝保の力與つて大なるものであつたが、其後支那進貢を絶つへき等數箇條の令あるに及び、物議頗る沸騰す、此際に朝保は終に要職を退き、悟性亭を結びて閑居し、明治九年五十四歳にして没す、和歌數百首、詩數篇、上京日記、等の遺稿今に存す、鄭嘉訓としては、其書、畫、共に世に愛重せられてをる。

(一) 昔之下 平敷屋朝敏

今は昔、何某の按司とかやきこゑ給ふいまそかりけり、仲島のあたりに忍びてわわしかよふ所ありけり、よしや君といふうかれめかれになん有ける、其遊女岡谷にかゝやくはかりにて、心はへも優になつかしく、かいよみひきしらふるふし／＼もすくれにたれば、世の中ゆすりてめてはやし、契を結ふたほかりけり、中にもこの按司ここにふかふものして、女もこよならなんたもいたてまつりける、いかなるつ

いてにかこらんしそめ、いかなるをりにかたわしそめけむ、そのほごのこはき、もたかねはかす、扱八月十五夜もろ共に那覇の入江の月見し給ふに、御舟のよそいもこご／＼しからす忍びてなりけり、むつまじうたほしける御隨身ふたり、酌るるわらわのわかしけなるひごり、梶ごるたのこふたりはかりなん有ける、雲晴空すみて万里の外まで照渡れるいはんかたなし、るりのやうなる水の上よりさし渡るなごこの世もたはへす、あふの松山はるかにみゑて紫雲寺の法の鐘幽にきこゆ、渡地の浦には遊女どものうたい遊ふも哀にたもほす、波のまに／＼なかれゆくに、これなん住吉のきしご申せは、さしごめさせてこらんするに、松の生さま岩ほのた、すまひなごもた、ならぬに、井かきのわたりかう／＼しう物さひて、しらゆふの月になひくもたかしう見ゆ、松を秋風吹音にこゑうちそふる浦波も哀にひ、きて、月の光も所からこごなる、按司  
たもふごち夜舟こき、てすみよしのうらめつらしき月を見るかな  
よしや君

今宵みる月のあわれにすみよしのきしかた行へたもひのこさて

御隨身しけはるにさかつきをたまはりて

またもこむ秋の今宵はいさしらす

このたまへは

さためなきよのうらめしきかな

さてうちなきければ、按司もしほたりたはず、ひとりの御隨身

なれし鹽路の梶まくらうきねそかはるこの海は

さたからかにうたひたるいさわかし、よしや君

今宵一輪みり清光いつれの所になかからん

といふことを、かれふひんかの聲にて朗詠したるいはんかたなくともしろし、更行まゝにいご、面白さまさりて、一刻千金にもかうましき夜のさまなり、かくて遊び給ふに、秋の夜のなかきもほごなく明ゆけはかへらせ給ひぬ

その後渡りたはして、つごめて出かてにやすらひ給ふほど、前枝の千種みたれあひて、霧立わたる朝ほ

らけの庭、艶にたかしきに、女のねたれの姿いご、うつくしうなまめいたり

いてにかこらんしそめ、いかなるをりにかたわしそめけむ、そのほごのこはき、もたかねはかす、扱八月十五夜もろ共に那覇の入江の月見し給ふに、御舟のよそいもこご／＼しからす忍びてなりけり、むつまじうたほしける御隨身ふたり、酌るるわらわのわかしけなるひごり、梶ごるたのこふたりはかりなん有ける、雲晴空すみて万里の外まで照渡れるいはんかたなし、るりのやうなる水の上よりさし渡るなごこの世もたはへす、あふの松山はるかにみゑて紫雲寺の法の鐘幽にきこゆ、渡地の浦には遊女どものうたい遊ふも哀にたもほす、波のまに／＼なかれゆくに、これなん住吉のきしご申せは、さしごめさせてこらんするに、松の生さま岩ほのた、すまひなごもた、ならぬに、井かきのわたりかう／＼しう物さひて、しらゆふの月になひくもたかしう見ゆ、松を秋風吹音にこゑうちそふる浦波も哀にひ、きて、月の光も所からこごなる、按司  
たもふごち夜舟こき、てすみよしのうらめつらしき月を見るかな  
よしや君

常に御消息のたゆることなし、たゆればこれより聞へてかたみにいさふかし、されどあまたの人に契を

わくる身にて、思ふようにあひたてまつることなら

て、心つくしなることのみたほかる、ある時黒雲ご

のといふ人にさそはれて、佐敷といふ所へまかりて

、そこにみそかはかりご、まりぬ、そのほど御消息も

朝霧のたち出かたくやすらへはいご、いろそうやごの秋萩

いか、せんごて手をごらへてうちまもりたまへは、はつかしけにかいそむきて

なをふかく立そへ色もなき花のねもかくしせん

今朝のあさきり

といふあてにろうたし

またのごし梅の花さかりに、さほることものして渡り給はさりければ、よみてたてまつりける

色も香もかいなきものはうくひすの音信もこぬ

やごの梅か枝

御返し

匂ふてふ軒端のむめの花の枝にかよふこ、ろの色はみさるや

常に御消息のたゆることなし、たゆればこれより聞へてかたみにいさふかし、されどあまたの人に契を

わくる身にて、思ふようにあひたてまつることなら

て、心つくしなることのみたほかる、ある時黒雲ご

のといふ人にさそはれて、佐敷といふ所へまかりて

、そこにみそかはかりご、まりぬ、そのほど御消息も

和文及和歌

昔之下

うけたまはらて、心もどなふ戀しきことかきりなし、さてたもふあたりは二三里ばかりもへたつらんかしなど、人しれすれもひて

空かけるつはさもかなやどきの間にたもふその人みてもくるへく

かへりくる道にてすて舟を見て

よるへなくうきて世渡るみつからや波にたよふ海士のすてふね

按司もいかにまちごふにたはしけんかし、其夜やかて御消息たてまつりければ、いそぎ渡りたはしつめつらしきにもいと、御思はまさりけんかし

あら玉のとしのちとせもふるはかりまち遠なりし君にもあるかな

あるし

はつかしやひなにとしへていかはかりうごろへにたるすかたなるらん

扱このほごのこともきこへいて、かたみになき給ふほとに鳥も啼ぬ

またいつのちきりもしらぬ手枕になにいそくらんごりの初こゑ

あるし

たまさかにあふよの空よ心してしはしなあけそどりはなくとも

さいひけれど、ほどなう明ゆけは例のいてかてにやすらひ給ふほど、庭の梅に黄鳥の啼ければ、かれ聞給ひ、うらやましき契にも有かなとて

ねくらしむる春のうくひすたき出てたそふごころもまたはなのかけ

あるし

やごしめてたきふし花にちきりぬるこゝろの色、のそれもひとゝき

なにこごかあたならぬと、なみたみたるふせいはいと、見すてかたければ、明はては人目もいかゝとていそぎかへりたはしぬ、道すからつとたもかけそひて、ごのにははしても露忘られ給はず、女も名殘戀しくなめたるに、御文あり開きてみれば

わかれつるけさの名殘もあらしかしこごしけき人はこごにまきれて

たもなの御たしはかりやとて御返し  
なをさりの思やものにまきるらんこやわすらる

ゝ時の間もなし

またその、ち渡りたはして、つとめて例のいてかてにし給へは、はや歸り給ひね、明果は見くるしかるへしなど、そゝのかしければ、立出給ひけるか、又かへりたはして、山吹のさかりにたはしけるを一枝をらせ給ひて

しはしごもいはぬはつらき色なからまたかへりみる山吹のはな

たこかましと見給ふらん、はつかしくこそこの給へは

行春のなこり露けき山吹はいはぬもふかき色香ごは見む

さいひもあへすなみた一目ふきたるふせいは、いと見給かたくてやすらひたはするほどに、明果ぬ、こはいか、せんと給へは、うち笑ひていか、せんけふはこもらせ給へ道のほごもはしたなかるへしとて、奥の間へいさな入れたてまつりつ、日たけぬれば、所につけたるあるしなごよそひいて、見たてまつるもめつらかにたはす、長き春の日にひねもすこもりたはして、あひ思ふ中のしつかにうらなくきこ

ゑかはし給ひけることゝもいかにき、所たほかりけん、暮かゝるほど、うしろの庭の松に咲かゝれる藤の色まさる夕はへをうちななめ給ひて

くりかへしみるもめつらし藤かつら花のあるしの袖のたくひそ

あるし  
まれひごのこご葉の花の色香にはかけてたよはぬやごのふちなみ

其夜もごまり給ひぬ、行すへかけていと、哀に淺からぬみものかたりに例のほどなう明ゆけはかへり給ひぬ、かごの本なる櫻の蔭までたくりたてまつりて

いか、思ひけん御袖をひかへて  
まてしはしかはかりものゝかなしきはこれやかきりの袖のわかれち

ごて打なきければ、あかきみまたもこそあはめ、さのみたもひないれそなごしらへて歸りたはしつ、なこりも戀しく哀にて内へもいらす前栽の草木をなかめありくに、柳の露になひくをうちななめ  
ひごかたになひく柳の糸ならば露もこゝろやたきごめてまし

いかてかゝる身にしも生れけんぞ、わかすくせそ返す／＼うらめしき、按司も名残戀しく露わすられ給はねは、其夜もたはさんとし給ふほごに、御母俄になやませ給へはごゝまり給ひぬ、日ころふれごたこたり給わてたもりのみゆけは、くすりすはらなにやかやごみ心のいごまものさで、をのつから御忍ひありきはたへたるへし、かゝるほごにかの黒雲殿、よしやか母によしや君をたへんごならば、千々の金に色々のたからをそへてたてまつらぬといひければ、母よろこひてかゝる幸こそまたなけれ、さらはいつにてもむかひ給へといひければ、雲殿よろこひて陰陽師に目をさわせければ、來る月の七日よき日なりいひければ、このよしいひねこせける、かういふ月は五月の末つかたになん有ける、よしやこのよしをきゝたごろきて母にいふやう、このわさに身をやつしてより、母の爲にまうけにたる金餘多あれは、それにて豊かによをわくり給ふへきに、なにぞと雲殿のかたへ送らんとはし給ふそ、按司の御情いかはかりごかたほしめす、此世はたゝ夢なり金のため人のなまきけなやふり給ひそといひければ、母いかりて

情ごは何物そ、かのたまのをゑは忽ち長者の身ごなりて浮世の榮華をきわむへし、汝をそたてしも若かゝるごごもやごてなり、わかいふごごにしたかわすは只今いつちへもうせねごて、打もころしつへければ、さらはごもかくも仰にごそしたかはめごごたへて、それよりひとまなる所にかきごもりて、物くふごごをたちにけり、按司ごの事ごしめし、いと哀に口惜しうたほせご、母君の御なやみは重く、又さらごもにきはひゆたかにたはする御身ならねは、ごりかへし給ふへきちからなく、たゝみ心のうちばかりにたほしくたくになん、よしやは君に別れてなにかせんたゝしなんごそご、いとゝ物くふごごをたちて啼より外のごごなし、鶴君ごてよしやにつかへけるうかれめそはにきて、いかにたほせはかう湯水をたにきごしめさぬそ、これいさゝかごてかゆなごすゝむれご、更にみもいれす、たゝうつふし伏たり、いかにたほしめすらんごごは丸にのたまはせよなごいへご、更にいらへもせねはうちなきてたちぬ、母はさま／＼の送物ごも所せきまてうけごりゑてよろこふ事かきりなし、よしやは扱も情なきものは人の心

なりけり、誠の母にてたはさはさはし給はしをご、うせにし母そ、いとゝ戀しき、之はまゝはゝごそいひける、ふしてみかはかりになれば、氣もつかれ身もたもければ、やかたしぬへしごさすかにもの心ほそう哀なり、夕つかたつるきみをよひ、つま戸を明させて庭をみるに、まつ春は難波芳野を忍ふよすかにうゑし梅櫻、升手せうつせる山吹藤つゝし、夏は卯のはなさかりなごしご、昔をしのふ花立はな夕かほ、池には法の蓮、この生にたごひける萍のよられゆくもあわれなり、秋はさほしかのさまにずる萩原、露にみたるゝかるかやをみなへし、萩薄藤はかま、立田姫の心をそめるつたかへて、いまた紅葉はせねごうすくれないの若みごりもをかし、扱また千代を松竹の枝うちかわすけしきも、けふまでごそはもてあそはめご、心をごめて詠むるに哀れなるごごたほかり、くるれは草むらのほたる飛出て、やり水にうつれるかけもすゝしきなり、このころ露ねられさりけるか、其夜少まごみたる夢に、ごのにまかりてをかむご見て、名残も戀しければ、ぬれはや人のごごちなきて、いまひとたひみんと、ごごさら

まごろめごまごろまれねは、夢にたにいまひとたひはごはかりのねかひもさらかにかなはし身の身や、其夜按司はほごの御前にて、母君の御爲にきせいし給ひけるに、すのこのもごに人たてり、たごご見むき給へはよしやなり、扱きみはわつらわれぬごご侍るか心地よしやごのたまへは、いらへはせて滑へうせぬ、あやしくて人をつかはして有様ごせ給へは、病重くてねやより外に出てすとなんいひける、又の日もよしやは庭をなかめたるに、ごご地あごかくすれごかひもなし、つるきみ鳴かなしむごご限りなし、母もくゆれごもかひなし、このごごやかてきごゑければ、國の人たしみなきて、きごむらふたほかりけり、ごしもわつか十九ごなん、あゝたしむへし、花顔忽ち狂風にやふられ、佳月浮雲に光をうしなへるごご、その頃ちまたの歌の、黒雲ごのゝうらめしや、あたら月のかほかくせると、哀になんうたいける、よるもひるもひまなく人まうて、あるはごごやう、あるはねふつし、また詩歌管絃ご

たむくるもあり、そのうたごにも  
 たもへたれも天津そらなるいなつまのひかりの  
 うちのあたし世の中  
 手向ぬるけふりよそてにちる露の玉ゆらみせよ  
 ありしたもかけ  
 たもひきやわたつるなみたの露分てかゝる野はら  
 にたつねこんごは  
 行へなく消にし人のかたみごてはらわてやみん  
 そてのしらつゆ  
 なき玉も哀ごやみん手向ごてなみたをそゝく花  
 のひごゑた  
 哀その消しなこりの露けさやたほよそひごのう  
 ごきそてまで  
 もしもそのくるしきなみにたゝよはゝこかねの  
 きしに南無阿彌陀佛  
 たもかりしさわりも消てむらさきの雲にさそわ  
 れにしへこそゆけ  
 此外あまた有しかごもたほへす、按司はかの身まか  
 りしよしきこしめし、胸ひしきてあはれにななう  
 たほさるれご、母君の御腦いと重ければわたり給は

す、秋になりてなん少したこたり給ひければ渡りた  
 はしける、門をいり給ふよりもの哀なり、前栽もあ  
 れてすのこそいまいよつ有しにかわるこゝちす、  
 つる君出来てまつ打ななく有様きこゆ、かしこへも  
 のせんにきはまりしより、湯水をたにみにいれすひ  
 きかつきてなき給ふより外のことなかりき、あす身  
 まかり給はんとて夕つかた、なつかしけなる氣しき  
 にて庭をうちななかめ、又の日はまはのきはまても庭  
 をなん詠め給ひき、之はかの手そさひなりやかんこ  
 しられしを、かたみにもごてうはひごり侍りき、御  
 覽せよごてふごころよりしろきうすやうのふみめく  
 ものどりいたす、ひらきて見給へはその手にて  
 わするなよむかしの人となりぬども袖ふれなれ  
 し軒のたちはな  
 なきあとにきてみんひごのたもごにも哀はかけ  
 に萩か枝のつゆ  
 藤かゑもわすれしなその夕くれにかけしこご葉  
 のつゆのなさけを  
 君ごはゝかたれいまはのゆふへまでつゆわすれ  
 すご萩もすゝきも

朝顔の露のいのちをしらすして身を松竹にいはい  
 こしかな  
 草の葉に風まつ露のそれよりもわか身やあたに  
 まつ消なまし  
 松竹に万代遠くちきりてもたれ朝顔の露の身な  
 らむ  
 聲をたにきかてわかるゝ歎きせむ昔をいまの身  
 のうへにして  
 ごふるくはかなきさまにかけるは、よはりての手  
 なりけりごみ給ふにも、哀のみつきせす  
 あらさらむあごのかたみご水くきにふかきあわ  
 れをかきやなかせ  
 常にすみける所を御覽すれば、ふるき衾ふるき枕ち  
 りはみて残れる、誰ご共にかどうち歎き給ひて  
 残りても誰ごゝもにかゝさねけむふるき衾のう  
 らめしのよや  
 暮ぬれど立出かたく悲しくて、そこにねたまひぬ  
 ちりつふるふるき枕によりふしてしのふもかな  
 しありしよの夢  
 たゝその折の心地して、ごもにね給ふやうにたほさ

たゝこゝに今もそひねごたもふまでたもかけご  
 まるねやの手まくら  
 あくれはなくくいて給ひぬ、をりしも庭の千種み  
 たれあひて、露立わたる朝ほらけたほしいてられて  
 やすらひつゝななめ給ふ  
 なき人のありしをしへご咲花のたもかくしする  
 霧もなつかし  
 尾花のまねくも哀れにたほして  
 なき人のかへりもやくる花すゝきなをまねき見  
 よそての秋風  
 それより墓にまうてゝ見給ふに、かなしきごごたく  
 ひなし、いける人にもいふごご何やらたほくの  
 たまひて  
 たつねごふわれをたれごて一ごごのこたへたに  
 せぬ昔のしたひご  
 ごの給へは、暮のうち震動してしはしやます、之に  
 つけても哀のみまさり給ふ、ごのにたわしてもゝの  
 ゝみかなしく哀なれば、したひやゆかまし、しらぬ山  
 路にひごりいかにこゝろのほそう哀ならん、なごた

ほしつゝくる折しも、空にその聲にて

あさましや人をたもひの消やらてなをいつまで  
か身をこかすらん

どいふあたりをみあげ給へは、雲一むら有てなにも  
みへすかなしくて

それどきくこゑもなつかしなしくはすかたを  
みせよむら雲のうち

この給へは、有しなからの姿あらわれいて、下りき  
てなつかしけにみたてまつる、あか君今はいづくに  
あるそちかうよりこよこの給へは、いらへもせてさ  
め／＼こなく、密わはせは消うせぬ、又ある寺の和尚  
座禪し給ふ夕つかた、窓ちかく若き女のことゑにて

死出の山わかい道は雲くらしか、けててらせ  
法のごもし火

こいひければ、あやしくて窓たし明てみ給へは人も  
なし、哀闇にまよへる人ならんどあはれにたほして  
、誰ごはしり給はされど、いどねもころに御經よみ  
て吊ひけるごなむ

按司このこときこしめし、哀れの人なん、ひごりい  
かにまよふらん、いて我行て道しるへせん、待もこ

そすれど、それより御ものをたちて、たゝそのいそ  
きをし給ひけるごそ

『ある人のいはく、よしや君ごきこゑしうかれめ  
は、慶安三年庚寅に生れて、寛文八年戊申に身  
まかりぬ、在世わつか十九歳の間なるを、其名  
高くのほりて、遠き日の本まで聞えしものなれ  
は、朝敏かいひけんやうに、かいよみ引しらふ  
るふし／＼もすくれにたれはご、昔の下にひき  
たこしかいつくるもむへなりごそ、歌に、  
昔のしたにありごもよしや君かため  
いまはむかしの水くきのあご』

(二) 短歌及長歌 宜野灣朝保

○水石契久

動きなき御世を心のいはかねにかけてたゑせぬ瀧  
の白糸  
汲かはず間居の外のみちまて酔の盛と見ゆるけ  
ふかな

○紅葉如醉

れ遊はん折をわて、をれる巖に長き日の、くる、  
もしらて白雲の、かゝる高嶺の山櫻、咲は又咲桃  
の花、も、よろこひの心には、何のつらさも梨の  
花、ちらぬ程に打はふち、雉子うたへはうたひ  
つゝ、あかる雲雀の雲井より、歸るご見れば蛙鳴  
、川のつゝみのすみれ草、咲も珍らし花むしろ、  
いく重かさねてその上に、八重の花咲山吹は、い  
はぬ色にていはつゝし、あかき心のゆかりごて、  
なひきかゝれる藤の花、春のなごりをたしむまに  
、夏のひかけに打むかふ、葵かさして神山に、の  
ほり／＼て郭公、初音待わて歸るさの、空もくも  
りてさみたれの、日數ふりつゝさひしくも、水鶏  
鳴なるやみの夜を、月になしたる卵の花の、白き  
扇の涼しげに、蓮にほへる池見れば、泉流れて底  
清み影をうつしてごふ螢、鳴てもわつゝなく蟬の  
、聲のしきりに待わひし、秋をむかへて吹風の、  
萩の上葉に音すれば、萩は錦をうち重ね、露けか  
りける花薄、まねく袂やにほふらん、雁も來にけ  
り鹿も鳴、虫の聲々あわれごて、霧のまかきはた  
てたれご、月はくまなくさやかにて、鶉なく野に

○幸逢太平代

花にゑい月にうたひて遊ぶこそこの大御代のつご  
めなりけれ

○暮春鶯

今はごてふるすに歸るうくひすの聲こそ春のゆく  
へなりけれ

○不二を見て

布しのねをふりさけみれば白雲のうへにも雪はつ  
もるなりけり

○夕立雲

天つ日のしはし隠れし夕立の雲の高ねはくつれす  
もかな

○夏夢

短夜の夢さしもなくあらましの吾世長くも見ゑわ  
たる哉

○定家卿一字題をひろひごりてよめる四季の長  
歌

梓弓春は霞を曳つれて、出て鳴つる鶯の、聲にひ  
らけし梅の花、見てもあかねはそのにほひ、袖に  
うつして青柳の、いどにひかれて野に山に、うか

うかれ出、きけはほろ／＼とひ立は、鴨の羽音は  
 白菊の、花にまざる見し人の、心ふかくもそめ  
 出す、葛や紅葉のから錦、きつ、かへりし秋のあ  
 と、つきて冬には初時雨、ふりみふらすみたく霜  
 のさゆるあしたの薄氷、くたく敷の音をへて、ふ  
 るや寒もたもしろく、つもり／＼し雪の上、ふめ  
 る跡をはをし鴨の、鷹にたはれてかくれゆく、草  
 の影より暮そめて、歸る家路の空寒く、衾かつき  
 て寐たる夜の、夢をいくたひ驚かす、音はたかは  
 す椎柴の、木の實ましりに落たるも、拾はぬ御世  
 は此御世と、鳥の初音に起出、たのかつとめを  
 つとめつ、いとまある日は月花の、影をたつね  
 て遊ひつ、かゝる御代こそ嬉しかりけれ、

世中の遊ひ所は月花のかけより外にあらしと  
 そ思ふ



琉球の各地方を旅行する人は、山の頂、河の岸、森の  
 中、道路の側、などに大げさな碑石の立ちをを見る  
 であらう、概して久米村大夫若しくは明清冊封使の手に  
 成たもので、堂々と明清の正朔年号を記して、橋梁を  
 架設したとか、道路を修繕したとか、堂宇を建てたど  
 か、を書き立て、をる、茲に擧ぐる一は、浦添に在る  
 琉球最古の金石文で、首里城門外の「石門のひのもの」  
 、那覇港口(ヤラザ)城上の「屋良佐もりのひのもの」、  
 と共に純粹の琉球文で書かれてをるのは頗る珍重す、へ  
 きものである、二は、那覇久米村聖廟構内に在るもの  
 で、名護親方、寵文、程順則の撰である  
 舊來琉球に於ける法令訓示等は、凡て假名交りの候文  
 体で、書法も凡て御家流であつたのである、茲に擧ぐ  
 る、三「獨物語」は有名なる具志頭親方、文若、蔡温の  
 遺書で、全文五十二箇條より成る、今其二箇條を抄録  
 す、四「御教條」も亦蔡温の名で傳へられてをるが、實  
 は蔡温幕下の士豊川親方の手に成たものである、全文  
 三十二箇條より成る、今其五箇條を摘記す、

第七章 碑文、候文、及漢詩

久米村は明の洪武永樂年間に移植された閩族三十六姓  
 裔孫の住する部落で、右來冊封貢進の時には久米村人  
 専ら通譯の任に當り、琉球支那交通の連鎖として琉球  
 社會に尊重されてをて、漢文と詩は實に彼等の専有  
 であつたが、今日に至ては見るに足るものもない、  
 茲に擧ぐる、五詩の「東苑八景」は、程順則の作で、首  
 里城東の崎山別莊八景を詠したものだ、これさへあ  
 まり名吟といわれぬ、つまり現今の琉球に於ける漢  
 文及詩は其發達程度甚だ低く、其流行區域も亦頗る狭  
 いことは事實である、

(一) ようこれのひのもの

りうきう國てたかすねあんしむそい、すへまさる  
 王にせかなしは、うらむそいより、しよりにてり  
 あかりめしよわちやこと、うらむそいのようにこれ  
 は、わちのてたの御はかやりよるけにて、御さう  
 せめしよわちへ、ちよきよらくけらわかけらわ  
 めしよわちへ、大ちよもいかなしむやかなしみ御  
 みつかいめしよわちへ、あごはてたかすへあんし

碑文、候文、漢詩

ようこれのひのもの

琉球國新建至聖廟記

五十三

むそいかなしも、御ちよわひめしよわにあにあれ  
 はと、千代萬代なるまでも、御なはのこらしゆ  
 るて、御さうせめしよわちへと、このひのものは  
 たてめしよわちやる、この御はかのさうちは、う  
 らむそいまきりより、ほん正月まねにきよらくか  
 らめくへしと、み御み事むかみ申候

このすみのあさくならはほるへし  
 万曆四十八年かのへさる八月吉日

あすたへ三人

いけくすくの大やくもい  
 よもたもさの大やくもい  
 ちよみくすくの大やくもい  
 ちうふきやう二人  
 あはこんの大やくもい  
 こちひらの大やくもい  
 いしふきやう一人

(二) 琉球國新建至聖廟記

夫以聖人而君天下、不如以聖人而師天下也、君天下

者澤及於一時、師天下者舉凡古今來天之所覆地之所載舟車所至日月所照之處靡不被教化焉、噫豈偶然哉、蓋聖稽古危微之旨、竟以是傳之舜、々以是傳之禹、々以是傳之湯、々以是傳之文武周公、至我孔子而集其大成、所以刪詩書定禮樂贊周易作春秋、使天下後世之君臣父子夫婦昆弟朋友、無不相安於名分、靡有亂者、較之君天下者、何如也、琉球遠在海外、去中國万里、宣若不聞聖道者、然自明初通貢獻唐玉爵、至洪武二十五年、王子泊陪臣子弟始入大學、復遣闕人三十六姓往譯焉、万歷間紫金大夫蔡堅、始繪聖像、率卿中縉紳、祀於其家、望之儼然令人興仰止之思、不可謂非聖教之流於海外也、至皇清定鼎、聲教誨敷、斯文不振、較前尤盛時、有紫金大夫金正春、於康熙十一年議請立廟、王允其議、題下地久米村、命匠氏庀材、運以斧斤、施以丹雘、至康熙十三年告竣、越明年塑像於廟、左右列四配、如中國制、王乃命儒臣、行春秋三丁釋奠禮、既新輪奐、復肅俎豆猗歎、盛哉、從此觀車服禮器恍如登闕里之堂躬逢其盛也、師天下之功、不於此而見無外哉、臣順則、奉王命紀建廟顛末、謹摛筆而記、以勸諸石、永垂不朽云

(三) 獨物語

- 一、國土に申者前以万事相計得置不申者不叶儀多々有之候、右條々之儀大略左に申述候
- 一、迎當國之儀、大海之内隣國も無之一國立居候付而は、風干乏災殃相防候手殿兼而仕置不申は叶不事候
- 一、異國船漂着に付而は、其人數相賄其船及破損候時者、仕立船を以差送候計得仕置不申は不叶事候
- 一、唐之仕合次第指揮使擊使不圖致渡海儀も有可之候、兼而其用意仕置不申者不叶事候
- 一、江戸立又は唐へ慶賀使謝恩使杯之御物入も兼而計得置不申は不叶事候
- 一、御太子様御上國に付而は、太分之御物入前以計得置不申は不叶事候
- 一、百年に一度冠船御渡來之時其御物入太分至極候、漸々相貯置不申は不叶事候
- 一、右數箇條之外御國元へ王子按司親方便者杯又唐へ進貢接貢差遣候入目之儀者例年之勤候
- 一、唐世替程之兵乱差起候は、進貢船差遣候儀不能

成、或十四五年或二十年三十年も渡唐斷絶仕候儀案中候、御當國さへ能々入精本法を以相治置候は、至其時も國中衣食並諸用事無不足相違、尤御國元へ之進上物は琉物計に而致調達其御斷申上可相濟積候、若御政道其本法に而無之我々之氣量才辨迄を以相治候は、國中漸々及衰微御藏方も必至致致當迫候儀決定之事候、右之時節渡唐斷絶候は、御國元へ進上物之儀琉物調も不罷成言語道斷之仕合可致出來候

(四) 御教條

一人間之道に申者、孝行題目に候、孝行に申者、諸士百姓共、其身之行跡題目して、家中人數其外親類縁者に至迄、睦敷取合、尤御奉公人者、國家之爲何篇入精、又百姓者家業無油斷相勤、各件之勤を以父母安心させ候儀、孝行に申事候、若行跡不宜、或家中親類縁者之取合不睦、或御奉公付而忠義之心立無之、或家業之働致油斷、箇様之不届共有之候而者、何程父母へ衣食之類結構相備候共、父母安心無之積候

、此心得を以て諸士百姓共、孝行之勤致可執行事

- 一本宗正統之嫡家者、則一門之根源に候、一門之儀元祖一人之孫々に而、骨肉一体之筋候間、如何にも睦敷取合、就中嫡家者何れに而其取持有之儀、孝者之大本候、上下共其了簡可爲肝要事
- 一元服婚禮之儀、上下共分限次第如何にも重厚に可相行候、就中婚禮之儀者、夫婦之縁組に而、人間題目之勤候、此儀致疎略候得者、女人之節儀輕々敷筋相成、甚不宜候事、女人節儀之儀者、常々正敷相勤候所より、父子之道も正敷罷成事候、右之譯往古之聖人別而肝要に被申置候、如何成雖爲下輩、女人節儀之儀、就中入念候儀可爲題目事
- 一、夫婦之儀者、人運万事付面之根本候、此心得を以如何にも睦敷取合、何篇義理正道熟談致し、万事可入念候、若各存分相構候は、夫婦之道不相立、誠以家道之妨甚不宜事候、此譯得致致落着、万事計得入念、首尾相勤候儀可爲專一事
- 一、兄弟舅甥之類者、天性之親敷者候、其妻々迄も此心得を以如何にも睦敷取合可致候、然共右妻々之儀依時に著各致勘違不和之基差起候儀も可有之候、且又



兄弟舅甥にも慈心に被隔天性之情愛確と致忘却候方も可有之候、此儀皆以愚痴之舉動人倫之妨甚不宜候、何れも天性取合大切存、互致情愛候儀可爲最要事

(五) 漢詩

○東苑八景  
○東海朝曦

宿霧新開敵海東 扶桑万里年飛鴻

渺魚小艇初移掉 搖得波光幾點紅

○西嶼流霞

海角晴明嶼色明 流霞早晚漲西罍

若教擲管詩人見 定作箋頭錦繡香

○南郊麥浪

錦阡繡陌麗南塘 天氣清和長麥秧

一自東風吹浪起 綠紋千頃映溪光

○北峯精翠

北來山勢獨嵯峨 葱鬱層々翠較多

始識三春風雨後 奇峯如黛擁素螺

○石洞獅蹲

仙桃花發洞門開 猛獸成群安在哉  
將石琢爲新白澤 四山虎豹敢前來

○雲亭龍涎

凌雲亭子有龍眠 吐出珠瓊滾々圓

今日東封文筆秀 好題新賦續甘泉

○松徑濤聲

行到徂徠萬籟清 銀河天半早潮生

細聽又在高松上 葉々迎風作水聲

○仁堂月色

東方初月上山堂 万木玲瓏帶晚霜

照見皇華新鉄筆 千秋東苑有輝光



琉球の研究

下卷終

後序

予は茲に「琉球の研究」上中下を完結したが、實はほんの輪廓を畫いたばかりである、述べた事があまり多方面なご、紙數に限られてなるだけ簡略にしたのご、筆が思ふやうに運ばぬごで、意味が充分に徹らぬ箇所少なからぬごは遺憾である、他日機會を得たならば、訂正もし増補もして、少なくとも今の三倍大にするつもりである、此書は、過去の琉球が漸やく人に忘れらるゝを惜み、現在の沖繩が廣く世に知られんごを望み、やがて湮滅せん事實を記し置て後世に遺さんため、身に少々の餘裕あるまゝ、道樂半分に書き綴つたものである、回顧すれば、予が

33  
553

版權  
所有

明治四十年六月廿五日印刷  
明治四十年七月二日發行

定價金參拾錢

長崎縣北松浦郡平戸村二百二十五番戸  
青森縣士族  
著作者兼發行者 加藤三吾

印刷人 熊澤武二

印刷所 魁成舍  
長崎縣佐世保市松浦町五十一番地

親しく視た琉球は、はや數年の昔になつた、此書の記事も大半は既に歴史の資料となり了つた、若しも幾十百年の後に琉球の當時を追想する人があつたならば、必らずや此書を以て一の好伴侶とするであらうことは、予の自ら信じて自ら慰めてをる所である。

加藤三吾記

33

553

版權  
所有

明治四十年六月廿五日印刷  
明治四十年七月二日發行

定價金參拾錢

長崎縣北松浦郡平戸村二百二十五番戸  
青森縣士族  
著作者兼發行者 加藤三吾

長崎縣佐世保市松浦町五十一番地  
印刷人 熊澤武二

長崎縣佐世保市松浦町五十一番地  
印刷所 魁成舍

親しく視た琉球は、はや數年の昔になつた、此書の記事も大半は既に歴史の資料となり了つた、若しも幾十百年の後に琉球の當時を追想する人があつたならば、必らずや此書を以て一の好伴侶とするであらうことは、予の自ら信じて自ら慰めてをる所である。

加藤三吾記

終